

当館所蔵の「絵入り本」解題①

星 瑞穂

はじめに

近年まで、国文学分野において、絵が研究されることはほとんどなく、それは美術史の領域であった。しかし、それは大きく見直されつつある。これは絵巻・絵本の絵師や製作者に関する研究が進んだことに起因するが、やはり、絵と本文を切り離すことはできないという考え方が再評価されはじめたことが最も大きな理由である。

当館には、多くの「絵入り本」が所蔵されている。しかし、貴重な古写本の陰に隠れて手つかずの状態となっているのが、現在の状況である。そこで本稿では、これら「絵入り本」の解題を紹介することによって、多く一般に利用してもらいたいと考え、書誌情報、内容の解説を加えて記すこととした。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』における「国文」の項目に挙げられている資料から、「絵入り本」を抽出して調査した。この中で物語系の資料は、写本・版本含めて全部で五一三件。うち「絵入り本」は、八五件である。取り上げる順序は『改訂 内閣文庫国書分類目録』における目録題に拠った。

なお、「絵入り本」の定義であるが、上記に挙げた「国文」の項目のうち、内容に添う挿絵・地図・図版など、本文中に挿絵を伴うものすべてを対象とした。

【一】『伊勢物語』（嵯峨本第一種） 慶長一三年刊 二冊

〔請求番号特〇六〇・〇〇一七〕

『伊勢物語』は、在原業平をモデルとした「男」を主人公にした歌物語である。作者は不明ながらも平安時代には成立しており、現代まで人々に長く読まれてきた文学作品の一つである。長らく写本で伝えられてきたが、近世に入ると大量に出版されて広く流布した。

また、『伊勢物語』の挿絵は構図やテーマをそのままに、絵画、屏風絵、あるいは蒔絵や着物の柄に転用されるなどして、工芸・美術史の一部をも形成した。『源氏物語』にはすでに、作中で『伊勢物語』を絵と共に楽しんでいる場面があり、最も古くから挿絵で親しまれた文学作品の一つである。

本書はその中でも、近世以降の『伊勢物語』の多くの版本に多大なる影響を及ぼした、嵯峨本の第一種本である。最初の『伊勢物語』の版本であることはもちろん、国文学の古典作品の中でも最初に出版された刊本で、絵入版本としてもごく初期のものである。

料紙は色変わりの料紙を用い、本阿弥光悦の書を木活字にして印刷している。表紙には雲母刷りで草花模様が加えられ、非常に豪華な芸術品としての側面を持つ。これは、貴人への献上品、贈答用の特注品として製作されたためである。挿絵は上巻に二五図、下巻に二四図の計四九図。以後、『伊勢物語』の版本は多くがこれを踏襲し、四九図の挿絵を入れることが

定番となる。

【書誌】

外題・「伊勢物語上」「伊勢物語下」(中央黄色料紙刷題簽)

表紙・原装藤色地草花模様雲母刷表紙(二七・〇糎×一九・五糎)

墨付丁数・①五一丁、②六四丁

挿絵枚数・①二五図、②二四図

印記・なし

【刊年・刊行者】

慶長一三年刊。

刊記によれば、底本は天福二年に藤原定家が孫娘のために書写したという天福本である。ここに中院通勝(号・也足叟)が校訂を加えた。刊記の末尾には自署の花押がある。

川瀬一馬氏の研究により、嵯峨本はその使用された木活字の違いから、全部で五種に分類されており、本書はそのうちの第一種本にあたる。本書の活字の様式はやや肉太で光悦の書風を最も忠実に再現しているもので、五種の中で最初に刷られたものとされる。同版本は、秋田県立図書館、安田文庫に所蔵されているが、極めて貴重なものである。明治二〇年に購入されて当館の所蔵となった。

【二】〔伊勢物語〕(覆嵯峨本第二種) 慶長年間刊 二冊

和学講談所旧蔵「請求番号特一一六・〇〇〇二」

嵯峨本の第二種本は、前に挙げた第一種本に比べて活字の様式が異なっており、やや筆跡が繊細であるのが特徴である。第一種本の活字を流用し

ている部分も見られるが、ほとんどが新しく作られた活字で刷られた。また、刊記に、第一種本とまったく同じ中院通勝の自署の花押があることからみて、第二種本は第一種本と同じ慶長一三年に出版されたと考えられている。

本書はその第二種本の覆刻本である。したがって刊記は第一種本ならびに第二種本と同一であるが、中院通勝の花押はない。木活字は壊れやすく大量の印刷には不向きなため、慶長一三年の第二種本を版木に覆せて整版に彫りなおしたものと考えられる。色変わりの料紙が用いられているものの、オリジナルに比べて色が濃いのが特徴で、全体的な見栄えは劣る。当時の需要に合わせて製作されたレプリカであり、当時の嵯峨本の人気をうかがわせる。

挿絵は、第二種本が第一種本の挿絵をそのまま使っているため、本書も第一種本と同じ挿絵である。ただし覆刻のため、やや精緻さに欠く。

また表紙は改装されているが、題簽は第一種本と同一の活字が用いられているため、元題簽をそのまま貼りなおしたものと考えられる。

本書は和学講談所の旧蔵本である。明治五年に文部省管轄の公開図書館である書籍館が受け継ぎ、さらにその二年後の明治七年に官立の浅草文庫に移行された。現在、浅草文庫の旧蔵本は大部分が内務省所管を経て当館が引き継いでいる。本書はそのうちのひとつである。

【書誌】

外題・「伊勢物語上」(左肩打付墨書)「伊勢物語下」(左肩黄色料紙刷題簽)

表紙・改装縹色表紙(二六・五糎×一九・〇糎)

墨付丁数・①五一丁、②六四丁

挿絵枚数・①二五図、②二四図

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・①一ウ欠。

【刊年・刊行者】

第二種本そのものに関しては、第一種本と同じ慶長一三年の刊行と考えられているが、本書は覆刻のため正確な刊年は不明である。ただし、料紙や体裁が、嵯峨本の装丁と近似しているため、少なくとも慶長年間には覆刻されていたと考えられる。

【三】伊勢物語註絵入 寛永年間刊力 二冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号二〇二・〇三一八」

本書は『伊勢物語』の出版史の中で、嵯峨本の影響下に製作された絵入の整版本のごく初期の形のものである。

上下あわせて四九図の挿絵がみられ、上巻に二五図、下巻に二四図を配するのは嵯峨本を踏襲したもので、挿絵の構図も嵯峨本に似せて描かれている。

行間に簡単な注釈が加えられているのが本書の最大の特徴である。『伊勢物語』の注釈書は平安末期から鎌倉初期ころに書かれ始め、以降、近世の国学の時代に至るまで様々な研究者の手によって様々な写本・版本が製作された。その注釈の影響力は大きく、室町時代ころに付けられた古註は、荒唐無稽な内容が多いものの、それが独立した物語として分化し、室町時代物語（御伽草子）や謡曲の成立に影響しているといわれている。

本書は近世初期の出版物であり、注釈も、登場人物の名前や地名を考証する程度に留まり、特徴的な注釈内容を持つわけではないが、それまで写

本で伝えられてきた注釈書の影響を濃く残すものである。本来版本の注釈は頭書に記されるのが通例で、本書のように行間に記されるのは写本の古い体裁を意識したもの。匡郭がなく行数も不定で、挿絵の前が散し書きになっているのも、この当時まで物語は写本で享受されるものという認識があつたため、写本の体裁をとっているのである。

巻末には跋文が加えられており、これによれば藤原定家が書写した天福本を底本とし、好事童蒙のために注釈を書き加えた旨が記されている。これは嵯峨本第三種の跋文を転用し、版元の刊記を新たに加えたものである。

【書誌】

外題・①「新版／伊勢物語／註絵／入／上」、②「新版／伊勢物語／註絵／下」（中央四周双辺刷題簽）

表紙・改装縹色表紙（二六・五糎×一九・〇糎）

墨付丁数・①三九丁、②四八丁

挿絵枚数・①二五図、②二四図

印記・「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

版元は中村五兵衛。京都寺町二条下ル。桐花堂を名乗る。寛永から元禄ころにかけて多くの本を出版しており、特に日蓮宗に関連した仏書が多い。本書には刊年が記載されていないが、寛永六年版『伊勢物語』や寛永二〇年版『伊勢物語』、寛永一七年版『あた物かたり』と体裁が近似していることから、寛永年間の出版ではないかと想定される。寛永年間には版木を用いた整版本『伊勢物語』の開始にあたり、本書も黎明期の『伊勢物語』の絵入版本であるといえる。

註が施された整版本のうちでは、最も古いもの一つに分類できる。

【四】新板改正伊勢物語 宝永五年刊 二冊

旧蔵者不明「請求番号二〇二・〇三六九」

本書も絵入で出版された『伊勢物語』の一つである。

前述した通り近世期に大量に出版されたものの一つであるが、本書は一五・五糶×一一・〇糶の小型本で、なおかつ箱入りの珍しい例である。小型本で制作される例は少ない上、まず版本が箱に入れられることはほとんどない。上下合わせて四三図の挿絵がみられ、必ず四九図を載せる嵯峨本やその影響下の整版本とは異なっている。しかし絵の図柄は嵯峨本に近く、構図も一般的な『伊勢物語』の挿絵の伝統を踏襲したものである。本書は後刷り本のため、比較的刷りが悪く、版木の磨滅がみられる。同版本は、現在、都立中央図書館特別文庫や鉄心斎文庫などが所蔵する。

【書誌】

外題・「新板／改正／伊勢物語／絵入／上」「新板／改正／伊勢物語／絵入／下」（中央双辺黄色料紙刷題簽）

表紙・原装紺色草花模様表紙（一五・五糶×一一・〇糶）

墨付丁数・①四二丁、②五四丁

挿絵枚数・①二三図、②二〇図

印記・「内閣文庫」

備考・箱（一七・五糶×一二・六糶×三・八糶）入り。蓋の表に題簽が貼られていた跡があるが失われており、箱書等は見られない。朱色料紙（一・五糶×八・〇糶）に「伊勢物語」と墨書きしたものが同封されているが、比較的新しい上、大きさからみて元題簽とは考えにくい。

【刊年・刊行者】

刊記に「宝永戊子正月吉日」とあり、宝永五年刊行とわかる。寛文七年

に出版されたものの後刷りで、刊記部分だけが彫りなおされている。

版元は京都三条通出雲寺和泉掾。江戸日本橋南一丁目出雲寺和泉掾は出店にあたり、幕府御用書肆を務めた。松栢堂を名乗る。姓は林氏で林羅山の縁者であったらしく、幕府御用書肆を務めたのもその関係によるものといわれ、林羅山の蔵書を引き継いだ内閣文庫とも縁が深い。本書が刊行された宝永五年当時は、五代目林元丘が当主で、京・江戸の両店を同時に相続していた。

【五】うつほ物語 延宝五年刊 三〇冊

水野忠邦旧蔵「請求番号二〇二・〇三四七」

『宇津保物語』は『源氏物語』に先立って成立した、我が国で最初の長編小説である。清原俊蔭という人物が遣唐使として渡航、難船し波斯国（ペルシャ）に辿り着くところから物語は始まり、やがて俊蔭がこのとき手に入れた琴を巡り、その子孫たちの運命が描かれる。作者は源順といわれているが判然としない。

というのも『宇津保物語』には、古い時代の写本が存在しないためである。『源氏物語』の作中に絵巻が登場するにも関わらず、現存する最も古い写本は永禄一一年のものであり、すでに伏見天皇在位中の永仁七年には稀書扱いになっていた。そのためか、本文の混乱は甚だしく、錯簡、重複、脱字などの多くの誤りがあらゆる写本に残され、本来の正しい物語の姿が現在に伝わっていないのである。江戸時代から国学者によって本来の姿を復元しようと研究がなされてきたが、今なお、結論はない。

本書はその『宇津保物語』の延宝五年に刊行された整版本である。版本

では、これに先立って元和寛永年間に古活字版、万治三年に整版が製作されたが、それは最初の「俊蔭卷」のみであった。本書は初めて全編通して刊行されたものにあたる。全三〇冊の大部である。ところが、元来本文に誤りが多いにも関わらず、さらにこの延宝五年版は、巻の順序を誤っており、その上題簽を貼り間違えていて、そこにさらに脱文という誤りが加わったため、この本で『宇津保物語』を読むことは難しく、案の定それほど経たないあいだに絶版となってしまうたようである。しかし、この『宇津保物語』全編刊行の影響から、『宇津保物語』を検討しようという気運が国学者たちのあいだで高まり、元禄ころまでに多くの校合本が製作された。

本書も、朱書・藍書で校合がされている。校合者は不明だが、「楼のかみ上之二」という題簽の貼られた二九冊目の末尾に、朱書で「宝暦四年五月廿六日校合了」とあり、校合の時期ははっきりしている。また本文の校合だけでなく、間違った題簽にも訂正がされており、表紙に朱の打付書で、正しい巻名と順番が書かれている。ただし、これにも一部誤りがあり、内閣文庫の函架番号も混乱したまま所蔵されるに至っている。

挿絵は各冊に三丁から六丁ほど入れられている。『宇津保物語』の本文には「絵詞」ないし「絵解き」と呼ばれる、挿絵について説明した文章が混入しているが、延宝五年版は、この「絵解き」の文を意識したと思われる、おおむねそれに従った挿絵が施されている。『宇津保物語』の絵巻や奈良絵本は、「俊蔭卷」に限っているため、全編通して挿絵が入れられたのはこの延宝五年が初めてであった。勿論、これに先立つ絵巻も存在したと思われるが、現存はしていない。

また本書は、天保の改革の推進者で、国学者でもあった水野忠邦の旧蔵である。全冊の一丁目に忠邦の蔵書印「引馬文庫」と、同文庫の分類用の印で勾玉の形をした「物語」という陽刻印が押されている。忠邦もまた研

究のために、すでに校合の入った本書を用いたことが想定される。

なお、本書はいくつかの研究書に「関東大震災によつて焼失したものとされている例があるが、もちろん誤りで、極めて良い保存状態で当館に所蔵されている。

【書誌】

外題・「うつほ物語」

表紙・原装紺色表紙（二六・三纏×一八・七纏）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・一冊目「年蔭下」四一丁（六図）、二冊目「としかげ下」三八丁（四図）、三冊目「蔵ひらき上之一」四二丁（五図）、四冊目「蔵ひらき上之二」四四丁（二図）、五冊目「藤原の君」五五丁（六図）、六冊目「たゝこそ」三四丁（五図）、七冊目外題欠二八丁（四図）、八冊目「蔵ひらき」五六丁（六図）、九冊目「祭の使」四八丁（五図）、一〇冊目「ふきあけ」四七丁（五図）、一一冊目「ふきあけ上」二五丁（三図）、一二冊目「菊の縁上」二八丁（三図）、一三冊目「菊の縁」三六丁（三図）、一四冊目「あてみや」二八丁（四図）、一五冊目「初秋上」五三丁（六図）、一六冊目「初秋下」四一丁（三図）、一七冊目「たつの村鳥」三二丁（三図）、一八冊目「国ゆつり」朱書「蔵ひらき下」五八丁（四図）、一九冊目「国ゆつり」四五丁（六図）、二〇冊目「国ゆつり中之二」三〇丁（三図）、二一冊目「国ゆつり上之二」四〇丁（四図）、二二冊目「国ゆつり上之二」四〇丁（四図）、二三冊目「さかの院上」朱書き「国ゆつり」三五丁（三図）、二四冊目「さかの院中」朱書「国ゆつり」三三丁（二図）、二五冊目「さかの院下」朱書「国ゆつり」三七丁（三図）、二六冊目「楼のかみ」三一丁（四図）、二七冊目「楼のかみ下之二」四一丁（三図）、二八冊目「楼のかみ上之二」朱書き「上之二」四九丁（五図）、二九冊目「楼のかみ上之二」朱書き「下之二」三四丁（二図）、三〇冊目「蔵ひらき」五一丁（四図）

匡郭・一九・七糶×一五・〇糶

印記・「引馬文庫」「物語」(勾玉形)「大日本帝国図書館」「内閣文庫」「日本政府図書」「尚□亭」(三冊目「蔵ひらき上之一」のみ)

備考・三冊目「蔵ひらき上之一」一才に不明印記「尚□亭」とある。「引馬文庫」より先に押されていた跡がみられる。校合者の印か。

【刊年・刊行者】

刊年は一八冊目(題簽「国ゆつり」朱書「蔵ひらき下」)に「延宝五年丁巳年初春吉辰開板」とある。版元の記載はなく、刊行者は不明。

【六】うつほ物語 文化十五年(補刻)刊 三〇冊

大学旧蔵「請求番号二〇二・〇三五四」

前述したように『宇津保物語』は、整った底本のないまま延宝五年に出版されたため、すぐに絶版となった。しかし、時代は下って文化年間、再び国学者たちのあいだで『宇津保物語』研究の機運が高まり始めた。こうして文化三年に延宝五年版の補刻本が出版され、村田春海などの手によって新たに版本から校合本が作られるようになった。このとき、混乱していた巻の順序は改められたが、題と本文の不一致はそのままにされている。この理由については定かではないが、版元の便宜的な都合によるものとの説が強い。版元は大阪の書肆・奈良屋長兵衛で、延宝五年の刊記の前に「文化三年丙寅三月吉旦 書林 大阪本町四丁目葛城宣英堂奈良屋長兵衛板」と追加されている。

本書はこの文化三年補刻本のさらに後刷にあたり、文化一五年に再び出版された。この前年には、細井貞雄が「俊蔭巻」に校合を加えており、い

まだ盛んな『うつほ物語』研究を見込んで出版されたと思われる。奈良屋長兵衛の刊記が削られ、そのあとに同じ大阪の書肆にあたる秋田屋太右衛門の刊記が追加された。これは版木に補刻したのではなく、新たに刊記を刷った一丁を追加したものである。また二五冊目「あて宮」には巻末に貝原益軒の『堪忍記』四冊、二六冊目には絵入『曾呂利狂歌話』『商人軍配記一名出世早合点』各五冊の広告が記載されている。秋田屋太右衛門の広告である。

なお、本書は明治二年から四年のあいだ和書を管理していた文部省の前身にあたる大学の旧蔵本である。大学が廃されて文部省となったのち、浅草文庫に移行。その後、当館に引き継がれた。

【書誌】

外題・「うつほ物語」

表紙・原装紺色表紙(二五・五糶×一八・〇糶)

墨付丁数・前述延宝五年版と同じ

挿絵丁数・前述延宝五年版と同じ

匡郭・一九・七糶×一五・〇糶

印記・「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」「内閣文庫」「久寿の屋」

備考・二五冊目「あて宮」の巻末に広告あり。「貝原先生述／堪忍記／半紙本／全部四冊／大阪心齋橋筋安堂寺町／秋田屋太右衛門板」。三丁目が綴じ間違いで上下逆様になっている。二六冊目の巻末に広告あり。「曾呂利狂歌話 絵入全部五冊」「商人軍配記 一名出世早合点 川島信清画 全部五冊」。二八冊目「国譲中の一／正本上巻」巻末に文化五年の刊記と跋文。三〇冊目「国譲下／正本蔵開下巻」の巻末に文化三年と延宝五年の刊記。

【刊年・刊行者】

二八冊目「国譲中の一／正本上巻」巻末に文化一五年の刊記、「文化十五

戊寅年三月補刻／心齋橋筋あんど町／秋田屋太右衛門」とある。四周双辺の匡郭は一七・五糶×一一・五糶で、本文の匡郭とは大きさが異なるため、後補されたものとわかる。また三〇冊目「国譲／正本蔵閣下巻」の巻末には「補刻文化三年丙寅春三月吉旦／書林」とあり、「書林」以下の書肆の名前が削られている。これは文化十五年に秋田屋が出版するにあたり、文化三年補刻本から書肆名を削ったと思われる。またそのあとすぐに「延宝五年丁巳年／初春吉辰開板」と、オリジナルの延宝五年版の刊記がそのまま残されている。

文化三年版を出版した奈良屋長兵衛は、姓は葛城氏で宣英堂と号する。文化文政年間を中心に、俳諧に関する出版物を多く出している。店の場所は大坂本町二丁目、博労町、本町四丁目、本町二丁目と四度変わっている。文化三年版は本町四丁目に店があったときの出版物である。

本書を出版した秋田屋太右衛門は、奈良屋と同じ大坂の書肆である。姓は田中氏、宋英堂と号した。出版分野は多岐に渡り、大坂で最も大きな書肆のひとつである。

【七】「うつほ物語」 万治三年刊 三冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特〇二八・〇〇〇一」

本書は前述した延宝五年版、文化三年版、文化一五年版に先立つ『宇津保物語』の整版にあたる。古活字版に続いて万治三年に刊行された。

全三〇冊の大部であった前掲の二つと大きく異なるのは、本書は全部で三冊であるという点である。これは内容が俊蔭巻に限られているからである。そのため、前掲の版本と比べると本文の乱れも少なく、この部分だけ

で十分に読むことができる内容となっている。

そもそも『宇津保物語』は、古い時代の完全な写本が存在しないため、天皇家や堂上家でも部分的な享受しかされてこなかった。そうした中、完成した物語として広く流布したのが俊蔭巻であり、現存する『宇津保物語』の絵巻や奈良絵本などはほぼすべてこの俊蔭巻だけを題材にとっている。むしろ、中世から近世にかけて一般に流布していた『宇津保物語』とは、すなわち俊蔭巻のことであり、延宝五年に全三〇冊が出版されるまで、多くの人々はその全容を知ることにはなかつたのである。

俊蔭巻は、清原俊蔭が遣唐使として日本を発ち、難船して波斯国に辿り着くところから始まる漂流譚、また俊蔭の娘が不遇をかこち洞穴（うつほ）で息子を育て、やがて成長した仲忠がその後の主人公となっていく貴種流離譚などで構成され、テーマの珍しさなども手伝って人気を集めたようである。

本書は、こういった従来一般に伝わってきた『宇津保物語』の姿を残したまま出版されたものであるといえる。なお、挿絵の図様の一部が承応三年版『狭衣物語』の流用であるという指摘がされている。

【書誌】

外題・「うつほ物語上」「うつほ物語中」「うつほ物語下」

表紙・改装縹色表紙（二一・五糶×一五・〇糶）

墨付丁数・三四丁（上）、三二丁（中）、二七丁（下）

挿絵枚数・四図（上）、四図（中）、四図（下）

匡郭・一六・五糶×一一・五糶

印記・「秘閣図書之章」「日本政府図書」

備考・刊記は巻末ではなく、下の最後の二七丁目の板心に記されている。また、本書は改装されているが、前掲の『伊勢物語註絵入』と同一の題簽

および表紙となっており、同時期に改装されたと思われる。

【刊年・刊行者】

板心の刊記は「万治三庚子歳仲秋日／洛陽今出川林和泉掾開板」とある。林和泉掾は前掲『新板改正伊勢物語』と同じ出雲寺和泉掾である。出雲寺は最初、今出川で本屋をはじめ、そのち小川一条上町および下町、また三条通りへと、当時のメインストリートに時代にあわせて出店していたらしい。

【八】『源氏物語』 承応三年刊 六〇冊

内務省旧蔵「請求番号二〇二・〇三五」

『源氏物語』は紫式部の手による長編小説であることは言うまでもないが、その享受史において本書の果たした役割は大きい。

『源氏物語』は多くの写本が存在し、絵巻や絵本も製作され、中世には広く流布していたといわれる。しかし、それは上流知識階級に限ったことであり、一般庶民まで広く浸透していたとは言い難い。近世に入り、慶長期に伝嵯峨本、元和寛永の頃に古活字版が出版されたが、『源氏物語』は長以上に難解な古語を含むため、一般庶民がこれを気軽に読むことはまず不可能であった。

そんな中、承応三年に初めて、清濁音が施され、行間に簡単な注釈を加え、その上、親しみやすい大量の挿絵をいれた『源氏物語』全編が刊行された。これにより、『源氏物語』は広く一般に広がり、元禄年間以降はパロディの対象となるほどに庶民に愛読されることになったのである。

本書はその承応三年版の再版本にあたる。初版は「手習」の巻に挿絵が

なかったが、再版するにあたり改めて六図が加えられた。絵師は、歌人であり蒔絵師でもあった山本春正である。

「夢の浮橋」の巻末に跋文が載っており、これによれば、彼は師・松永貞徳の助言を受けてこの六〇冊に及ぶ大作を完成させ、二二六図に及ぶ挿絵を描いたようである。跋文の年記が「慶安三年」で刊年と差があるのは、このころちょうど、山本春正は木下長嘯子の『挙白集』を完成させたがために、貞門派に公然と攻撃を受け、なかなか出版の機会を与えられなかったことが原因であるとされている。しかし、本書は承応三年に出版されると、その後、数十年に渡って再版され続け、近世期の『源氏物語』のもっとも基本的なテキストとなった。

本書は、本編五四帖五四冊（「若菜」は上下冊）に、「夢の浮橋」の続編として後人により書かれた「山路の露」一冊、注釈書『源氏目案』上中下三冊、「系図」一冊、「引歌」一冊を加えた全六〇冊から成る。

「桐壺」「帚木」の二冊には、旧蔵者の墨書による書き入れが散見される。また、「夕顔」が欠けており、この部分のみ写本によって補ってある。水がかぶった形跡があり、残念ながら保存状態は良いとはいえない。明治二二年に内務省が購入した。

なお改装の際に題簽を貼り間違えたらしく、巻名に一部誤りがある。正誤は以下の通りである。

- 「うつせみ三」↓「玉蔓」
- 「松風十八」↓「空蟬」
- 「乙女二十一」↓「松風」
- 「玉かつら二十二」↓「手習」
- 「みゆき二十九」↓「鈴虫」
- 「すゝむし三十七」↓「行幸」

「手ならひ五十二」↓「乙女」

【書誌】

表紙・改装縹色雷紋繫型押表紙（二七・〇糎×一七・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・「桐壺一」二八丁（五図）、「はゞき木二」五〇丁（八図）、「うつつせみ三」四二丁（五図）、「夕かほ四」四四丁（写本のため挿絵欠）、「わかむらさき五」五三丁（八図）、「末摘花六」三〇丁（五図）、「もみちのか七」三〇丁（五図）、「花のゑん八」一一丁（二図）、「あふひ九」四九丁（六図）、「さかき十」五四丁（八図）、「花ちる里十一」五丁（一図）、「須磨十二」四七丁（九図）、「あかし十三」四三丁（六図）、「みをつくし十四」三五丁（五図）、「よもきふ十五」二四丁（三図）、「せきや十六」六丁（一図）、「絵あはせ十七」一九丁（二図）、「松風十八」一一丁（二図）、「うす雲十九」三三丁（三図）、「あさかほ二十」二二丁（三図）、「乙女二十一」二二丁（三図）、「玉かつら二十二」七一丁（六図）、「はつね二十三」一五丁（二図）、「こてう二十四」二二丁（三図）、「螢二十五」二二丁（二図）、「とこなつ二十六」二三丁（三図）、「かゝり火二十七」四丁（一図）、「野わき二十八」一八丁（二図）、「みゆき二十九」一五丁（二図）、「ふちはかま三十」一五丁（二図）、「まき柱三十一」三八丁（四図）、「梅かえ三十二」一九丁（二図）、「藤のうら葉三十三」二五丁（三図）、「わかかな三十四上」一〇二丁（九図）、「若菜三十四下」一〇三丁（七図）、「柏木三十五」四二丁（四図）、「よこふへ三十六」一九丁（二図）、「すゝむし三十七」二八丁（三図）、「夕きり三十八」七一丁（七図）、「御法三十九」二二丁（二図）、「まほろし四十」二四丁（三図）、「にはぶ兵部卿宮四十一」一四丁（一図）、「紅梅四十二」一一丁（一図）、「竹川四十三」四二丁（四図）、「はし姫四十四」四〇丁（六図）、「しあかもと四十五」三八丁（五図）、「あけまき四十六」八九丁（九図）、「さわらひ四十七」二〇丁（四図）、「や

とりき四十八」一〇〇丁（一〇図）、「あつまや四十九」六七丁（七図）、「うき舟五十」七三丁（九図）、「かけるふ五十一」五七丁（六図）、「手ならひ五十二」五一丁（六図）、「夢のうき橋五十三」二〇丁（三図）、「山路の露五十四」三七丁（挿絵なし）、「源氏目案上」七〇丁（挿絵なし）、「源氏目案中」八一丁（挿絵なし）、「源氏目案下」六〇丁（挿絵なし）、「系図」二〇丁（挿絵なし）、「引うた」四五丁（挿絵なし）

匡郭・本文なし、挿絵一九・〇糎×一四・五糎

印記・「大日本帝国図書館」「日本政府図書」「明治十二年購求」

備考・雲母料紙の題簽に巻名を墨書。（前述の通り一部誤りあり。）「夢の浮橋」の末尾に、元奥書と跋文および刊記。「引歌」末尾にも刊記がある。

【刊年・刊行者】

刊記には「承応三甲午八月吉日／洛陽寺町通／八尾勘兵衛」とある。慶安三年に跋文は書かれており、実際に承応三年に出版するまで時間がかったことが窺える。版元の八尾勘兵衛は京都の書肆。名は友久。寺町通下本能寺町御池下ルに店を構え、慶安・承応年間から元禄・貞享頃の近世前期にかけて多く出版物を残している。

【九】〔源氏物語〕

承応三年刊 三〇冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号二〇二・〇三五三」

本書は前掲の承応三年版と全くの同版本である。ただし、全冊が改装されている上、短い巻同士が合冊になっており、全部で三〇冊にまとめられている。しかし、前掲の本では欠けていた「夕顔」も揃っており、内容に欠落はない。

また前掲の本に比べると保存状態も極めて良い。

前掲の本に比べてやや紙面が大きくとつてあり、ノドに印刷された丁数が確認できる。出版の際に紙を変更したと思われるが、版木の磨滅はほとんど見られないため、前掲本とほとんど変わらない時期に製作されたと思われる。

【書誌】

外題・「源氏物語きりつほ／はゝきゝ」（以下巻名）「系図／引歌」止

（中央無地刷題簽）

表紙・改装縹色表紙（二六・五糎×一九・二糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・「きりつほ／はゝきゝ」七八丁（二三図）、「うつせみ／夕かほ」八六丁（二二図）、「わかむらさき／すゑつむ花」八三丁（二三図）、「もみちのか／花のゑん」四二丁（七図）、「あふひ」四九丁（六図）、「さか木／花ちる里」五九丁（九図）、「すま／あかし」九〇丁（二五図）、「みをつくしよもきふ／せきやゑあはせ」六四丁（一一図）、「松かせ／うす雲／あさかほ」六六丁（九図）、「をとめ／玉かつら」九一丁（八図）、「初ねこてう／ほたるとこ夏」八一丁（八図）、「かゝり火のわけ／みゆきふちはかま」四二丁（七図）、「まきはしら／むめかえ／ふちのうらは」八二丁（九図）、「わかな上」一〇二丁（九図）、「わかな下」一〇三丁（七図）、「かしは木／よこふへ／すゝむし」八八丁（九図）、「タきり／みのり」九二丁（九図）、「まほろしにほふ宮／こう梅竹川」九二丁（九図）、「はしひめ／しいかもと」七八丁（一一図）、「あけまき」八九丁（九図）、「さわらひ／やとり木」一一〇丁（二四図）、「あつまや」六七丁（七図）、「うきふね」七三丁（九図）「かけるふ」五七丁（六図）、「てならひ」五一丁（六図）、「夢のうきはし／山ちのつゆ」五七丁（三図）、「目案上」七〇丁（挿絵なし）、「目案中」八一丁（挿絵なし）、「目案下」六〇丁（挿絵なし）「系図／

引歌」六五丁（挿絵なし）

匡郭・本文なし、挿絵一九・〇糎×一四・五糎

印記・「秘閣図書之章」「日本政府図書」

備考・金茶地唐草文様の四方帙入り。一〇冊ずつ三つに分けられていたようだが、二つ目の帙は失われており、「初ねこてう／ほたるとこ夏」から「あけまき」までが裸の状態である。三つ目の帙は破損しており、一部修復してある。

【刊年・刊行者】

「夢の浮橋」の末尾に、元奥書と跋文および刊記、「引歌」末尾にも刊記がある点は、前掲の本と同じ。版元の八尾勘兵衛も同一である。

【一〇】源氏袖鏡 万治二年刊 一二冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三・〇〇四二」

本書は『十二源氏袖鏡』の書名で知られる『源氏物語』の梗概書である。近世期の庶民にとって『源氏物語』は難解な上に長大で容易に読めるものではなかった。しかし、和歌の手本として、あるいは教養としての需要は大いにあった。そこで、五四帖を一二帖に縮め、ダイジェスト版として編集し、さらに絵入で出版したのが本書である。

ただし挿絵のない本文は、これ以前に『源氏物語大略』、『源氏大略』の題で慶安四年には初版が出版されていた。明暦二年に『十二源氏袖鏡』と題が改められて再版され、万治二年に初めて絵が入られて改めて新刊として出版された。本書はこの万治二年版にあたる。

挿絵は一三図あるが、承応三年版『源氏物語』からの流用が極めて多

い上、他の巻の他の場面を転用している箇所も見受けられる。例えば承応三年版の「蓬生」の絵が本書では「桐壺」に入っていたりとかかなり流動的である。それも、承応三年版の「夕顔」の挿絵にいたっては、本書では五か所に渡り再利用されている。これに限らず、何度も転用している箇所が、いくつも見られ、いかに便宜的で拙速的な出版であったかが想像されるのである。さらに残る二〇図は、万治二年版『住吉物語』からの転用である。残る一図は冒頭に石山寺で源氏物語を書く紫式部の挿絵が入れられた。これはこの当時多く見られる画風であり、おそらくこれもなんらかの絵入本からの転用であろう。

なお本書は絵入本に仕立て直す際に、跋文が記載された。この跋文によれば、本書の底本となっているのは、中世に写本として広く流布した『源氏大鏡』であったことがわかる。本書は明治一二年に内務省が買い求めた。

【書誌】

外題・「十二源氏袖鏡一（〜二二）」四周双边刷題簽（一七・五糎×三・〇糎）

内題・「源氏袖鏡」

表紙・改装浅黄色表紙（二八・二糎×一九・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二九丁（八図）、②三二丁（六図）、③三二丁（八図）、④三六丁（八図）、⑤二七丁（八図）、⑥三〇丁（一〇図）、⑦三〇丁（一二図）、⑧三六丁（一二図）、⑨二六丁（六図）、⑩四一丁（一六図）、⑪二七丁（八図）、⑫三六丁（一二図）

匡郭・本文なし。挿絵は①3才（二一・〇糎×一〇・八糎）、①3ウ（二一・一糎×一五・八糎）、①6才（二九・二糎×一四・三糎）

印記・「大日本帝国図書館」「日本政府図書」「内閣文庫」「明治十二年購求」

備考・ノドに丁付がある。挿絵の匡郭の大きさがまちまち。『源氏物語』と『住吉物語』の挿絵が混ざっているためだと考えられる。

【刊年・刊行者】

刊記は末尾の板心に記載されている。「万治二己亥仲春望日書林堂新刊」とある。書林堂という号は、書肆の一般名詞ともとれるので、どの版元を指すか定かではない。ただし、この万治二年版は、明暦二年版の版式をそのまま用い、また改題の理由を跋文に説いていることから、文脈上、明暦二年版の版元の中野道也のようにみえる。本書に転用されている万治二年版、寛文元年版の『住吉物語』は、中野道也の手によるものである。

【一】狭衣 承応三年刊 一六冊

内務省旧蔵「二〇三・〇〇五九」

『狭衣物語』は主人公の貴公子・狭衣の恋愛遍歴を描いた平安時代王朝物語のひとつである。『源氏物語』の強い影響下にあり、特に宇治十帖をなぞるような内容となっている。狭衣の造形は薫、飛鳥井君の造形は夕顔や浮舟を参考にしていると思われる。物語の結末そのものも「夢浮橋」に近似しており、作者が意図的に『源氏物語』を参考にしていたと考えられる。作者は、古くは紫式部の娘である大式三位などに比定されていたが、現在では、源頼国女が有力であるとされている。

本書はこの『狭衣物語』を最初に整版として出版した承応三年本である。目録一冊、系図一冊、物語本編一〇冊に、注釈書である『狭衣下紐』四冊を合わせ、全一六冊で構成されている。

『狭衣下紐』は、天正年間に里村紹巴によって書かれた『狭衣物語』の

注釈書である。里村紹巴は、和歌や『源氏物語』を三条西公条に教えを受けてのち連歌師として大成した。『狭衣物語』は『源氏物語』同様、連歌師たちに和歌の手本として広く享受されており、紹巴が注釈をつけたのもそこに理由がある。弟子たちによって書き継がれたが、本書に採用された『狭衣下紐』は、続群書類従本系の一本を底本にし、さらに里村昌叱の加筆した写本を参照しつつ、一華堂乘阿の門弟の切臨が大幅増補したものである。紹巴が書いたものと大きく変化しているが、今日では、本書に収録されたテキストが『狭衣下紐』の最も一般的なテキストとなっている。

また『狭衣物語』そのものについても、非常に伝本が多く、しかもその間の異同が大きいため、伝本系統がはつきりしない。元和九年に古活字版が出版されて以降、これをもとに本書やその後刷りが出版され、「流布本」と呼ばれる系統となつて近世期に一般に広がるのだが、この祖本がどの系統にあたるかについても諸説ある。

ただし、本書の出版により、揺れていた『狭衣物語』のテキストが統一され、広く人々に知られるようになった点を踏まえると、本書が近世期に果たしたその役割は大きいといえる。

なお、本書には②「下紐第四」の末尾に、跋文ならびに刊記がある。本来最後の一六冊目に位置するべきであるが、函架番号は二冊目になっている。なお、本書は明治一三年に内務省が購入した。

【書誌】

外題・「狭衣目録」「さころも一之上（〜四之下）」「下ひも一（〜四）」「狭衣系図」左肩無地料紙刷題簽（一四・〇糶×二・二糶）

内題・「狭衣目録」「狭衣卷第一之上（〜第四之下）」「狭衣下紐第一（〜第四）」「狭衣系図」

表紙・原装紺色卍繫草花丸文様（刷）（二一・〇糶×一五・七糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①「狭衣目録」一三丁（挿絵なし）、②「狭衣下紐第四」一八丁（挿絵なし）、③「狭衣第一之上」五二丁（八図）、④「狭衣卷一之下」四三丁（四図）、⑤「狭衣卷二之上」四八丁（三図）、⑥「狭衣卷二之下」六〇丁（六図）、⑦「狭衣卷三之上」四三丁（三図）、⑧「狭衣卷三之中」四八丁（四図）、⑨「狭衣卷三之下」五〇丁（四図）、⑩「狭衣卷四之上」四八丁（四図）、⑪「狭衣卷四之中」五三丁（五図）、⑫「狭衣卷四之下」五六丁（六図）、⑬「狭衣下紐第一」五二丁（挿絵なし）、⑭「狭衣下紐第二」二五丁（挿絵なし）、⑮「狭衣下紐第三」二六丁（挿絵なし）、⑯「狭衣系図」一六丁（挿絵なし）

匡郭・一六・五糶×一一・三糶

印記・「大日本帝国図書館」「日本政府図書」「内閣文庫」「明治十三年購求」

備考・⑩「狭衣卷四之上」題簽欠。①「狭衣目録」および②「狭衣下紐第四」末尾に刊記。②「狭衣下紐第四」の一八丁目は、跋文と刊記が載るが、丁付は一七丁まで。なお、②「狭衣下紐第四」の奥書は以下の通り。

「此物語のはても源氏夢の浮橋の面影也／少年と書そめて残おほくかきとゝめたり四冊／を全部も心あるべしはかりがたし後生の人／しるさるへし／天正十九年三月九日／臨江斎／法眼紹巴」（二七ウ）

「斯さころもの系譜は西三条道遥院／堯空尊者の御作云々尤精選なるへしこのころ他本をあつめ校合するに／展転書写のあやまりに損落の文字／又前後の錯乱ありて是非をわき／まへかたきところ／本書に考合て清／書せしめ畢に時承応甲午歳仲／夏日東京黄台山积野切臨叟誌之」（二八才）

【刊年・刊行者】

刊記は②『狭衣下紐第四』の奥書のあと（一八ウ）に「承応三甲午歳季秋吉辰／烏丸通二条上ル二丁目／三木氏親信梓行」とある。三木氏親信と

は、当時この場所に店を構えていた京都の書肆・三木太郎右工門のことで、承応年間から元禄年間にかけて出版を行っていた。文政年間からは同名の書肆が、京都寺町御池下ルに店を構えている。また、寛政年間から天保年間にかけて同地で三木安兵衛という人物が出版を行っている。これらの三木氏は同系であると考えられる。寛政一年に再版された『狭衣』には、「承応三甲午歳季秋吉辰／鳥丸通二条上ル二丁目／三木氏親信梓行／寛政一一年己未秋／寺町二条下ル丁／親信改名／三木安兵衛」とある。

ただし元来、本書は同じ京都の書肆・谷岡七左衛門から刊行されたものであった。宝玲文庫旧蔵本や東京芸術大学図書館本などが知られる。版木が三木太郎右工門に移ってから、大量に刊行されたらしく、同本の中でも本書の系統が最も多く現存する。双方を比較すると、一部覆刻とみられる部分がある。版木が磨滅したか破損するなどして、新たに彫りなおして補ったのだろう。⑤「狭衣卷二之上」三〇才の挿絵を谷岡版本と比較すると、陰刻と陽刻とで異なっている部分がある。

【二】狭衣 承応三年刊 一三冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号二〇三・〇〇六〇」

本書は前掲本と全くの同版本である。ただし、本書は改装されており、また「系図」と「目録」、「狭衣下紐」が二冊ずつ合冊になっているため、全部で一三冊である。

前掲本と比較すると、前掲本のほうの版本にやや磨滅が見られるため、本書のほう若干早い段階で出版されたと考えるのが妥当であろう。本書は紅葉山文庫の所蔵であったが、改装および合冊にされて、出版当時の面

影を残していなかったため、原装の前掲本を内務省が購入したものと想像される。また、本書も、本来最後であるべき「四之下」が三冊目として函架番号が付されている。

【書誌】

外題・「さころも 目録／系図」「さころも 一之上（四之下）」「したひも 一之二（三之四）左肩四周双辺刷題簽（一四・六糎×三・二糎）ただし、「したひも」の「一之二」「三之四」は改装の際に黒でスタンプされたもの。

内題・「狭衣目録」「狭衣卷第一之上（卷四之下）」「狭衣下紐第一（第三）」

表紙・改装縹色表紙（二一・〇糎×一四・七糎）

匡郭・四周単辺（一六・五糎×一一・三糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）①「狭衣目録」「狭衣系図」三〇丁（挿絵なし）、

②「狭衣卷一之上」五二丁（八図）、③「狭衣卷四之下」五六丁（六図）、

④「狭衣卷一之下」四三丁（四図）、⑤「狭衣卷二之上」四八丁（三図）、

⑥「狭衣卷二之下」六〇丁（六図）、⑦「狭衣卷三之上」四三丁（三図）、

⑧「狭衣卷三之中」四八丁（四図）、⑨「狭衣卷三之下」五〇丁（四図）、

⑩「狭衣下紐第三」二六丁（挿絵なし）、「狭衣下紐第四」一八丁（挿絵なし）、⑪「狭衣下紐第一」五二丁（挿絵なし）、

⑫「狭衣卷四之上」四八丁（四図）、⑬「狭衣卷四之中」五三丁

（五図）、

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」

備考・①は「系図」と「目録」の合冊。⑩は「狭衣下紐第三」と「狭衣下紐第四」の合冊で、外題には「したひも 三之四」とある。⑪は「狭衣下紐第一」と「狭衣下紐第二」の合冊で、外題には「したひも 一之二」

とある。①「系図」末尾に切臨の奥書と刊記、「狭衣下紐第四」末尾に里村紹巴の奥書がある点など、前掲本と同じ。ただし、版木の磨滅が少なく刷りの状態は本書のほうがよい。

【刊年・刊行者】

三木太郎右工門の刊記は、前掲本と全く同じ。ただし、版木の状態から見て、本書のほうが先に出版されていると思われる。

【一三】和泉式部物語 享保二年 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇三・〇一三五」

『和泉式部物語』とは、一般に知られる日記文学『和泉式部日記』のことである。写本には多くその題を『和泉式部物語』とするものがあり、本書もそのひとつである。長保五年四月から翌正月までの一〇ヶ月間に渡る、和泉式部と帥宮敦道親王との恋とその贈答歌を記したもので、平安時代の女流日記文学の代表的なものの一つである。ただし、著者については和泉式部とするのが通説だが、藤原俊成などの他作説もある。

本書は寛文一〇年に出版された絵入三冊本を、享保二一年に再版したものである。刊記だけが削られ、新しいものに直されている。これらの版本は、享禄二年書写の元奥書が記載されており、それが底本となっていたことがわかるが、該当する写本は現存していない。ただし、本文を検討する限り、応永本の系統であることがわかる。

『和泉式部日記』の現存する写本は、主に、三条西家本・応永本・寛元本の三系統に分類することができる。この中で最も善本とされるのは三条西家本であり、応永本系はそれに比べると文章の損傷が多いが、本書の影

響もあって版本として近世期に最も流布したテキストはこの応永本系であった。

この他、近世期に享受された版本のテキストとしては、扶桑拾葉集所収本と、群書類従本である。前者は応永本系を底本にして、三条西家本で校合を加えたもの。後者はこの扶桑拾葉集本に拠ったものである。近世期に特に研究対象となったテキストはこの群書類従本であり、いずれにせよ本書同様、応永本の特徴を踏まえたものであるといえることができる。

【書誌】

外題・「和泉式部物語」左肩打付墨書

内題・「和泉式部物語」

表紙・改装金茶色布目型押表紙（二六・〇糎×一八・〇糎）

匡郭・なし

墨付丁数・七三丁

挿絵枚数・一五図（二〇・六糎×一五・一糎）

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」備考・本文には匡郭がなく、丁付、板心もなく、写本の体裁を意識していると思われる。七三ウに記載の元奥書は以下の通り。

「写本云／此一冊ハ右中弁兼秀本ヲ従去ル月十四日／染筆今日終功畢／享禄二年五月朔日／右少将藤言継草名」

【刊年・刊行者】

七三ウに記載の刊記は以下の通り。

「享保丙辰孟春霽／道具屋町筋順慶丁／田原屋平兵衛」

田原屋平兵衛は、抱玉軒と号した大坂の書肆である。寛永から安永頃までの長期に渡って大坂での出版を担っていた。このころは順慶町に店があったが、のちに心齋橋筋塩町、車町に店を移している。安永三年に出版

した『幽遠随筆』は絶版を命じられた。

なお、本書の元の版である、寛文一〇年版の版元は、八尾清兵衛である。京都堀川通松原上ルに店を構え、寛文頃から寛政頃まで続いた書肆である。浄土宗関連の仏教書が特に多い。なお、京・大坂間の版木の移動は珍しい例ではなく、様々な理由で売買や譲渡の対象となっていた。本書もそのうちの一つである。

【一四】すみよし物語 宝暦九年刊 二冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三・〇一四三」

『住吉物語』は、典型的な継子いじめの物語で、後世の文学作品に大きな影響を及ぼした物語である。成立は『源氏物語』以前であるが、現存する本文は、鎌倉時代に擬古物語として改作されたものであるといわれている。内容は次の通りである。

主人公の姫君には惹かれあう四位少将という人物がいたが、継母にうとまれて引きさかれてしまう。継母はさらに謀計を巡らし、自分の実の娘と四位少将を結婚させてしまう。姫君はその上、継母に、入内や他の男性との結婚まで阻まれ、やむなく亡き母の乳母を頼って住吉に逃れる。自分が継母の謀計によって結婚させられたことを知った四位少将は、姫君を探し、ついに長谷寺で夢を得て姫君と再会。二人は都に帰って幸せに暮らす。

元来が伝本も異本も数多く、長期間に渡って最も多くの人々に読まれた文学作品のひとつといってもよい。近世期にも寛永年間には古活字版と整版がともに出版された。最初に整版として出版されたのは寛永九年で、中野道也による出版である。大量に流布したとみえ、現存する版本のほとん

どがこれの後刷である。

本書は、この寛永整版本と同じ版木を使い、そこに二〇図の挿絵を入れたものである。上下それぞれ一〇図が挿入されており、絵師は不明ながら非常に美麗で精細な挿絵である。なお、この挿絵は、万治二年版の『十二源氏袖鏡』に流用されている。雅な王朝文化が描かれた絵として、『源氏物語』の挿絵として転用可能だと考えられたためと思われる。

『住吉物語』は元来、絵入で親しまれたものらしく、中世から絵巻が製作されていた。近世期に入るとさらに、本書の挿絵などを参考にして、奈良絵本が大量に製作された。奈良絵本の中では、『文正草子』に並んで多く現存し、主に嫁入り本として珍重された。近世期に最も愛された物語のひとつであり、本書の挿絵は物語の流布に大きく貢献した。

【書誌】

外題・「絵／入／住吉物語 上(下)」中央四周双辺刷題簽(一八・六糎

×四・〇糎)

内題・「すみよし物語上(下)」

表紙・原裝紺色横刷毛目表紙(二六・〇糎×一八・三糎)

匡郭・なし

墨付丁数・三九丁(上)二七丁(下)

挿絵枚数・一〇図(上)一〇図(下)(二〇・四糎×一五・五糎)

印記・「大日本帝国図書印」「内閣文庫」「日本政府図書」「明治十二年購

求」

備考・朱書で校合が加えられている。上下ともに裏見返しに墨書で「大塚某蔵書」とある。

【刊年・刊行者】

下巻二七丁ウに刊記がある。次の通りである。

「宝曆九丁卯歳求之／皇都書林／寺町通松原下ル町／梅村三郎兵衛開版」梅村三郎兵衛は白玉堂（白玉房）と号した京都の書肆で、寺町通松原下ルに店を構えていた。比較的絵入本の出版を多く手がけていたと思われる。大坂、江戸に同名の書肆が存在するが、おそらく出店であろう。

【一五】発心集 刊年不明 四冊

和学講談所旧蔵「請求番号二一〇・〇一五三」

『発心集』は鴨長明が記した仏教説話集である。主に、僧侶の事跡、様々な男女の発心遁世譚、執着を巡る怪異譚などで構成され、百余話を収める。成立は従来『方丈記』が記された建暦二年以降と考えられていたが、近年は疑問視され、いまだ未詳である。説話の出典としては、『続本朝往生伝』、『宝物集』、『古事談』などがあげられるが、その他の仏教説話集に比べて『発心集』の特徴的な点は、そこに長明自身の随想・評論・説教が織り交ぜられている点である。後世への影響も大きく、承久四年に成立した『閑居友』には、『発心集』に言及している箇所があり、『閑居友』はこれに触発されて記されたものであったらしい。その他にも『十訓抄』、『平家物語』、『沙石集』などに共通した説話が収録されている。

慶安四年に初めて片仮名整版本が出版された。のち、寛文一〇年に平仮名整版本が出版され、このとき挿絵が入れられた。しかし、『方丈記』に比べると、あまり多く流布したとは言い難い。

本書は寛文一〇年版と同一の版木を用いた後刷であるが、刊記がないために刊年不明のものである。しかし、広く流布したと見え、多くが現存している。

挿絵は八八図。すべて板心に又丁がついているため、おそらく後補だろうと思われる。ただし本文の匡郭と同じ大きさであるため、他の版から流用したものではなく、本書のために新刻された絵であることは間違いない。おおよそ、説話の前に、それに該当する挿絵が入れられている。

また、本書は全八巻のものを、二冊ずつ計四冊に合冊にしてある。和学講談所の旧蔵本である。

【書誌】

外題・「長明発心集 一二（七八）」左肩四周単辺刷題簽（一七・五糎×三・七糎）

内題・「発心集第一（第八）」

表紙・原装紺色布目型押表紙（二五・六糎×一八・二糎）

匡郭・四周単辺（二〇・七糎×一五・五糎）

墨付丁数・①七四丁、②七〇丁、③七〇丁、④七八丁

挿絵枚数・①二六図、②一八図、③二二図、④二二図

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」備考・版木の磨滅がみられる。

【刊年・刊行者】

刊記の記載がないため不明。

【一六】宇治拾遺物語 万治二年刊 一五冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二一〇・〇二二一」

『宇治拾遺物語』は一三世紀前半に成立したとされる説話集である。「序」によれば編者は源隆国ないし「侍従俊貞」なる人物だとされているが、定

かではない。諸本により二冊・四冊・五冊・八冊・一五冊とまちまちであるが、所収されている説話は全部で一九七話数えることができる。これらの中には『今昔物語集』や『古本説話集』『古事談』などと同じ話がそれぞれ数十話ずつ存在し、直接的ないし間接的に、密接な関係にあるとされている。

会話を多く盛り込んだ軽妙な語り口で、漢籍を典拠とする話も和文に改めており、比較的平易な文章であるのが特徴。仏教説話も多く所収するが、笑い話が多いのも特徴の一つとしてあげることができる。

こうした親しみやすさからか、中世以降人々に愛読され、様々な作品に影響を与え、擬作さえ作られた。近世期に入ると、まず寛永年間に八冊本の古活字版として出版され、そのち万治二年に一五冊本の整版が出版され、その後、何度も再版された。本書はこの万治二年版にあたる。本書が一五冊となったのは、単なる印刷上の便宜的な措置であると考えられている。各巻に一〜五図の挿絵が入れられており、全体で計三四図の挿絵が入れられた。以降、近世期を通して出版された『宇治拾遺物語』はおおよそ本書の後刷りである。

【書誌】

外題・「宇治拾遺物語 一（〜八、一一〜一三）」左肩四周双边刷題簽に墨書（一四・二糶×二・二糶）、「うちしふい物語 九（十五終）」「宇治拾遺物語 十」「□□拾遺物語 一四」左肩无边刷題簽（一五・三糶×二・二糶）

内題・「宇治拾遺物語」

表紙・改装紺色表紙（二二・二糶×一五・三糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①五〇丁（五図）、②三五丁（五図）、③三六丁（四図）、④二二丁（二図）、⑤二二丁（二図）、⑥二四丁（二図）、⑦二

三丁（二図）、⑧二二丁（二図）、⑨二六丁（一図）、⑩二五丁（一図）、⑪二五丁（二図）、⑫二九丁（二図）、⑬二七丁（二図）、⑭二六丁（二図）、⑮二六丁（二図）

匡郭・四周单边（一六・七糶×一一・四糶）

印記・「昌平坂学問所」「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」「松崎文庫」「□家」

備考・①四三才に朱書で頭註が施されている。刊記に不明印記あり。

【刊年・刊行者】

刊記には「万治二己亥年初冬日／洛陽今出川／林和泉掾板行」とある。

林和泉掾は、京都の最大の書肆・出雲寺和泉掾のことである。前掲の『新板改正伊勢物語』ならびに「うつほ物語」と同じ書肆であり、万治二年当時の当主は初代林時元。明暦三年に和泉掾を受領し、江戸日本橋一丁目に出店して、以降、幕府御用書肆を務めた。

【二七】宇治拾遺物語 万治二年刊 一五冊

教部省旧蔵「請求番号二一〇・〇一一九」

本書は前掲の『宇治拾遺物語』と同版本である。

本書で特筆すべき点は、教部省の旧蔵本であるという点である。明治元年に神祇祭祀とその行政を司る機関として神祇省が設置され、明治五年に教部省と名前を改めた。この教部省は明治十年に廃止されているから、本書はこの教部省が設置されていた五年間のあいだに購入されたものと思われる。

当文庫で教部省旧蔵を示す「教部省文庫印」が押されているのは、国書

では七三部存在し、それらはすべて神書、史籍、有職の類である。

本書には、朱書ないし墨書で、教部省以前の旧蔵者の手によるものと見られる註や校合が施されている。主に頭書で施されているが、ここには、『和名類聚抄』『古事談』『日本三代実録』など様々な古典が引用され、内容が検討されており、本書が神書、史籍、有職の類書としての側面を同時に合わせもつことが注目される。

前掲本と比較すると、版木の磨滅が少なく、比較的早い段階で出版されたとと思われる。

【書誌】

外題・「うちしふい物語 一」「宇治拾遺物語 二」「うちしふい物語 三（〜十五終）」中央無地料紙刷題簽（二五・五糶×二・八糶）
内題・「宇治拾遺物語」

表紙・改装紺色布目型押表紙（二二・五糶×一五・五糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①五〇丁（五図）、②三五丁（五図）、③三六丁（四図）、④二二丁（二図）、⑤二二丁（二図）、⑥二四丁（二図）、⑦二二丁（二図）、⑧二二丁（二図）、⑨二六丁（二図）、⑩二五丁（二図）、⑪二五丁（二図）、⑫二九丁（二図）、⑬二七丁（二図）、⑭二六丁（二図）、⑮二六丁（二図）

匡郭・四周单边（一六・五糶×一一・六糶）

印記・「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」「匡廬」（陰刻正方印）

備考・①に新しい葉がはさんである。朱書「是と同種のもの已に一部借りあり／返却下度候／幸原」

【刊年・刊行者】

刊記には「万治二己亥年初冬日／洛陽今出川／林和泉掾板行」とあり、

前掲本と全くの同版。

【一八】宇治拾遺物語 「万治二年刊」 一四冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二一〇・〇一二三」

本書は刊記の部分が落丁しているが、前掲の二本と比較すると、同版本であることがわかる。特にいずれの本も③一四ウの竜虎の挿絵の左下の同一部分が欠けていることから、同版と見てまず間違いない。版木の磨滅は比較的少なく、早い段階での出版が想像される。本書は右上部分に虫が入っており、あまりよい保存状態とはいえない。第一冊目が欠けている。

【書誌】

外題・「宇治拾遺物語 一」「うちしふい物語 三（〜十五終）」中央刷題簽（一五・四糶×二・九糶）
内題・「宇治拾遺物語」

表紙・改装濃紺色表紙（二二・五糶×一六・〇糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①五〇丁（五図）、②三五丁（五図）、③三六丁（四図）、④二二丁（二図）、⑤二二丁（二図）、⑥二四丁（二図）、⑦二二丁（二図）、⑧二二丁（二図）、⑨二六丁（二図）、⑩二五丁（二図）、⑪二五丁（二図）、⑫二九丁（二図）、⑬二七丁（二図）、⑭二六丁（二図）、⑮二六丁（二図）

匡郭・四周单边（一六・五糶×一一・六糶）

印記・「昌平坂学問所」「大学蔵書」「浅草文庫」
備考・刊記落丁。第一冊目欠。

【刊年・刊行者】

刊記部分が落丁しているが、前掲二本と同版であると判断される。万治二年に出雲寺和泉掾により刊行された。

【一九】十訓抄 享保六年刊 一〇冊

神祇官旧蔵「請求番号二〇三・〇〇九八」

『十訓抄』は建長四年十月に成立したとされる説話集である。十篇の題目を立て、それぞれの徳目にふさわしい説話を分類して収録している。具体的な処世の道しるべとなることを目的として編んだ旨が序文に書かれている。しかし、著者は未詳。序と奥書の内容から察するに、六波羅北方の北条長時・時茂に仕えた人物で、出家ののち東山の麓に庵を結び『十訓抄』を記したという。

説話の典拠には『史記』『漢書』などの漢籍はもちろん、『万葉集』『大和物語』『宇治拾遺物語』など、様々な国書を見ることができ、しかもこれらを『十訓抄』の主題に沿うように要約、変換するなどしており、大いに著者の主観に基づき、方針をもった編纂がされていることがわかる。

主に写本は三巻本として伝えられてきた。近世期に流布した版本は主に、その中でも片仮名三巻本を元にしたテキストであるとされている。元禄六年に初めて平仮名本が刊行された。そして享保六年に再び新しく版がおこなわれ、そのときに初めて挿絵が入れられた。本書はこれに相当する。

これ以降『十訓抄』は、寛延四年、文化二年、天保一四年、と相次いで出版されており、無刊記の整版本も多く現存する。近世期を通して出版され続け、大量に流布した。

本書も前掲の『宇治拾遺物語』同様、教部省の旧蔵本である。

なお、本書には多少の錯簡が見られる。二冊目の一五丁目、丁付では巻二・一五丁の前に、六冊目の一五丁目にあるべき巻七・一五丁が入っている。そのため、二冊目には丁付が一五丁となっているものが二丁存在する。さらに、一〇冊目では、巻二・八丁にあたる頁が二丁ある。これらは丁が重なっている点からみて、改装したときに誤って混入したのではなく、おそらく出版当時から誤っていたものと思われる。

六冊目一才、九冊目一九才に朱書の付箋で註が施されている。筆者名は「男麻呂」となっている。

【書誌】

外題・「十訓抄 一（く）十」左肩四周双边刷題簽（一四・八糶×三・四糶）

内題・「十訓抄」

表紙・改装縹色布目型押表紙（二二・五糶×一五・五糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二八丁（四図）、②三一丁（五図）、③二三

丁（四図）、④二二丁（三図）、⑤三七丁（六図）、⑥二五丁（五図）、⑦二

二丁（四図）、⑧四一丁（八図）、⑨三二丁（六図）、⑩三二丁（五図）

匡郭・四周单边（一八・三糶×一三・三糶）

印記・「神祇官文庫印」「教部省文庫印」「神道事務局蔵書之印」「図書局

文庫」「太政官文庫」

【刊年・刊行者】

刊記には「享保六年辛丑歳首夏吉辰／撰陽 書堂磯野氏蔵版」とある。

書堂磯野氏とは、大坂平野町三丁目に店を構えていた書肆である磯野三郎右衛門のことである。なお、元禄六年版の『十訓抄』は、同じく大坂の書肆である磯野平三郎によるもので、栄商軒と号した。両者ともに出版書目が少なく、はっきりとしないが、おそらく同系であろう。

【二〇】古今著聞集 元禄三年刊 二〇冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二一〇・〇一三九」

『古今著聞集』は、橘成季が編んだとされる説話集である。書名や巻数は『古今和歌集』を意識したもので、全部で六九七話の説話が題目ごとに三十編に分類されている。出典の古今東西を問わないそれまでの説話集と違い、『古今著聞集』は日本の説話のみ収録しているのが特徴的である。しかもそれはすべて年代順に、関連性を持たせて並べられており、計画的な編纂の様子がみてとれる。

成季の記した序文によれば、元来は詩歌管絃に関する話を中心にまとめる予定であったという。事実、彼は藤原孝時の弟子で、花山院大納言藤原長雅に琵琶を伝授するほどの腕前であった。しかし、『古今著聞集』を編むうちに次第に他の物語にも興味を持ち、当初の予定を変更して多くの世俗的な説話を編集することになったようである。貴族の日記や記録類を一級資料として重視し、世俗的な説話に関しては直接の聞き書きをしようと試みている。そのため、独自の説話が多く収集され、『古今著聞集』はそれまでとは違う説話集として成立した。

現存する写本は甲本と乙本の二類に大別される。しかし、本書などの版本に利用されたテキストである流布本系本文は、欠落や誤写が多く、写本より大きく劣る内容であるといわざるをえない。しかし、本書は初めて挿絵入りで刊行されたこともあってか、そのうち版を重ねている。

本書はその初めて挿絵入りで刊行された元禄三年版にあたる。ただし、刊記の版元名がすべて削られていることから、のちに別の版元から刊行された後刷であったと推測される。

また挿絵に関しては、丁付がすべて又丁になっている。本書の一二冊目

には、八丁の丁付を持つ異なる頁が二か所あり、いくらかの乱丁落丁がみられる。

昌平坂学問所の旧蔵本であるが「浄名院蔵」の印記が全冊一丁右下にみられる。これは上野寛永寺三六坊の一つ、浄名院の蔵書印であると思われる。一時期同院の所蔵となっていたとみられる。

【書誌】

外題・「古今著聞集 一（二二）」左肩四周双边刷題簽（一五・〇糎×三・二糎）

内題・「古今著聞集」

表紙・改装縹色麻の葉草花丸文様刷表紙（二二・二糎×一五・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二八丁（四図）、②四六丁（四図）、③一七丁（四図）、④二〇丁（四図）、⑤六七丁（六図）、⑥四四丁（八図）、⑦一五丁（二図）、⑧三二丁（四図）、⑨二〇丁（四図）、⑩三〇丁（八図）、⑪三〇丁（六図）、⑫三六丁（六図）、⑬二二丁（四図）、⑭二〇丁（二図）、⑮二七丁（六図）、⑯五六丁（四図）、⑰二七丁（四図）、⑱二〇丁（四図）、⑲二四丁（六図）、⑳四七丁（二〇図）

匡郭・四周单边（二六・二糎×二二・八糎）

印記・「昌平坂学問所」「大学蔵所」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」「浄名院蔵」

備考・挿絵はすべて又丁。⑫八丁が二枚ある。⑳刊記の版元の名前だけがすべて空欄。①九丁が②九丁に入っている。②九丁は落丁。

【刊年・刊行者】

⑳四七丁末尾には「元禄三年／庚午孟春吉祥旦」の刊記があるものの、その下部にある「書林板行」の部分には、「武江」という江戸の書肆を示す記載があるのみで、本来そこにあるべき版元の名前は削られている。版木

が別の版元に移り、その先で出版されたものと思われる。またあるべきはずの建長の元奥書がない。

これは、オリジナルの元禄三年版から刊記の記載のある丁をはずし、代わりに別の頁を付け替えたため、刊記と同じ頁に記載されていた元奥書が脱落してしまったと思われる。ただし丁付の部分に虫が入っているため推測である。

【二一】古今著聞集 元禄三年刊 二〇冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二一〇・〇一四〇」

本書は前掲書と同版本であるが、大きく異なる点が二つある。

まずは二〇冊目の末尾である。四七才に建長の元奥書、および暦応の元奥書があり、最後に京と江戸の版元が四か所、刊記として記載されている。前掲書はこの部分はずし、彫りなおした刊記を付け替えている。

第二点は、挿絵の位置である。本書はどの段階で誤ったか判断がつかないが、挿絵の位置だけが錯簡している。偷盗の項目に、博打の挿絵が入れているなど、明確な間違いがある。また落丁している挿絵もあり、乱丁落丁はすべて挿絵に集中する。

【書誌】

外題・「古今著聞集 卷（二十）」左肩無地題簽に墨書（一六・六糎×三・三糎）

内題・「古今著聞集」

表紙・改装朱色正繫草花丸文様刷表紙（二二・〇糎×一五・七糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二八丁（四図）、②四六丁（四図）、③一七

丁（四図）、④一六丁（四図）、⑤六六丁（四図）、⑥四四丁（八図）、⑦一五丁（二図）、⑧三二丁（四図）、⑨二〇丁（四図）、⑩三〇丁（八図）、⑪三〇丁（六図）、⑫三五丁（四図）、⑬二〇丁（二図）、⑭二〇丁（二図）、⑮二七丁（六図）、⑯五六丁（四図）、⑰二七丁（四図）、⑱二〇丁（四図）、⑲二四丁（六図）、⑳四七丁（二〇図）
匡郭・四周单边（一六・二糎×一一・八糎）
印記・「昌平坂学問所」「書籍館印」「大学蔵書」「図書局文庫」「浅草文庫」「松崎文庫」
備考・挿絵を中心に乱丁落丁あり。

【刊年・刊行者】

刊年は刊記に「元禄三年庚午吉祥日」とある。前掲書では「吉祥旦」となっている。

版元は四か所あり「洛陽／永田調兵衛」「武江／武藤与惣兵衛」「同／河崎七郎兵衛」「同／高嶋弥兵衛」と記載がある。永田調兵衛はこの頃、京都錦小路通新町西入に店を構えていた京都でも最大の書肆である。文昌堂、丁字屋と号し、西本願寺、浄土宗西山派光明寺、浄土真宗仏光寺の御用書肆を務めた。祖を佐々木道誉とし、三代目調兵衛のときには、出雲寺和泉掾と親戚関係になっている。河崎七郎兵衛は江戸日本橋南二丁目に店を構えていた版木屋であつたらしい。元禄五年『萬買物調方記』に版木屋として掲載されている。特筆すべき点としては、貞享元年版『好色一代男』の版元でもあることだろう。連名の高嶋弥兵衛、武藤与惣兵衛に関しては、本書の刊記以外の記録に乏しく詳細は定かではない。河崎七郎兵衛と連名であることを考えると、版元であるというより版木屋であつた可能性が高い。

【二二】古今著聞集 元禄三年刊 二〇冊

神祇官旧蔵「請求番号二一〇・〇一三八」

本書は前掲の二本と同版本である。

ただし前掲の二本は共に昌平坂学問所の旧蔵書であったが、本書は神祇官および教部省の旧蔵である。すでに述べたように、神祇官の文庫には、神書、史籍、有職の類の本が収められた。国書では約七〇冊ほどが確認される。前掲の『宇治拾遺物語』や『十訓抄』など、神の靈験譚を多く収めた説話集は、神書の一つとして収蔵された。

本書は前掲本同様、挿絵を中心に乱丁、落丁が見られる。全体的に版木の磨滅も目立つため、元禄三年版としても最後のころに刷られたものと見られる。

【書誌】

外題・「古今著聞集 一（〜二十）」左肩四周双边刷題簽（十四・七糎×三・三糎）

内題・「古今著聞集」

表紙・改装紺色卍繫草花丸文様刷表紙（二二・〇糎×一五・六糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二八丁（四図）、②四六丁（四図）、③一七丁（四図）、④一六丁（四図）、⑤六六丁（四図）、⑥四四丁（八図）、⑦一五丁（二図）、⑧三三丁（四図）、⑨二〇丁（四図）、⑩三〇丁（八図）、⑪三〇丁（六図）、⑫三五丁（四図）、⑬二〇丁（二図）、⑭一〇丁（二図）、⑮二七丁（六図）、⑯五六丁（四図）、⑰二七丁（四図）、⑱二〇丁（四図）、⑲二四丁（六図）、⑳四七丁（二〇図）

匡郭・四周单边（一六・二糎×二二・八糎）

印記・「神祇官文庫印」「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官

文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」

備考・挿絵を中心に乱丁落丁あり。墨書で頭註の書入あり。⑫七才に版木の磨滅が見られる。①表紙の状態が著しく悪い。

【刊年・刊行者】

刊記は前掲本と同一。刊年は刊記に「元禄三年庚午吉日」とある。版元は四か所あり「洛陽／永田調兵衛」「武江／武藤与惣兵衛」「同／河崎七郎兵衛」「同／高嶋弥兵衛」と記載がある。

【二三】古今著聞集 元禄三年刊 一五冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号二一〇・〇一四三」

本書は前掲三本の覆刻であると思われる。

刊記には「元禄三年庚午孟春吉日」の記載があるが、版元名から京都の永田調兵衛だけが削られており、おそらく江戸で覆刻して出版する際に削ったのだろう。

しかし、刷りの状態はかなり良好で、乱丁落丁もほとんどない。前掲三本に比較すると、本書がもっとも状態がよく、出版当時の面影を残していると思われる。

ただし本書は改装で、元来二〇冊であったものを、合冊して一五冊にしてある。函架番号と巻の対応は以下の通りである。

①巻一、②巻二、③巻三・巻四、④巻五、⑤巻六、⑥巻七・巻八、⑦巻九・巻十、⑧巻十一、⑨巻十二、⑩巻十三・十四、⑪巻十五、⑫巻十六、⑬巻十七、⑭巻十八・巻十九、⑮巻二十

なお本書は紅葉山文庫の旧蔵本である。

【書誌】

外題・「古今著聞集 一（〜二十）」左肩四周双边刷題簽（十五・五糎×三・三糎）

内題・「古今著聞集」

表紙・改装紺色表紙（二二・二糎×一五・六糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二八丁（四図）、②四七丁（六図）、③三三丁（八図）、④六八丁（八図）、⑤五九丁（一〇図）、⑥五二丁（一四図）⑧三〇丁（六図）、⑨三六丁（六図）、⑩三二丁（六図）、⑪二七丁（六図）、⑫五九丁（一〇図）、⑬二七丁（四図）、⑭四三丁（八図）、⑮四七丁（一〇図）

匡郭・四周单边（一六・二糎×一二・八糎）

印記・「秘閣図書之章」（二種）「内閣文庫」

備考・⑭卷十八に挿絵の乱丁落丁あり。

【刊年・刊行者】

すでに述べたように、刊記から京都・永田調兵衛の名前だけが削られている。本書は覆刻とみられ、江戸で出版する際に永田調兵衛の名前が削られたと考えられる。したがって刊年は刊記の元禄三年からはやや下る可能性があるが、版木の磨滅はほとんど見られず墨ののりも良いので、覆刻の中では早い段階に出版されたものであるらしい。

【二四】古今著聞集 明和七年刊 一〇冊

内務省旧蔵「請求番号二一〇・〇一四二」

本書は元禄三年版『古今著聞集』を、明和七年に再版した後刷本である。

大坂の書肆・柏原屋清右衛門と河内屋茂八が、明和七年三月に版木を購入して大坂で再版した。同一の版木を用いているが、刊記の部分のみ、新たに彫りなおされている。

本書は元来二〇冊であったが、合冊されて一〇冊に直されている。函架番号と巻の対応は以下の通りである。

①巻一・巻二、②巻三・巻四、③巻五、④巻六・巻七、⑤巻八・巻九・巻十、⑥巻十一・巻十二、⑦巻十三・巻十四・巻十五、⑧巻十六、⑨巻十七・巻十八、⑩巻十九・二十

【書誌】

外題・「古今著聞集 一（〜十）」左肩四周双边刷題簽（一五・三糎×三・四糎）

内題・「古今著聞集」

表紙・改装布目型押横刷毛目表紙（二二・五糎×一五・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①七四丁（四図）、②三七丁（四図）、③六七丁（六図）、④五九丁（一〇図）、⑤八二丁（一六図）、⑥六五丁（一〇図）、⑦五八丁（一二図）、⑧五六丁（四図）、⑨四七丁（八図）、⑩七二丁（一八図）

匡郭・四周单边（一六・二糎×一二・八糎）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

備考・刊記部分のみ新刻。⑩七二才に広告あり（一八・二糎×一二・二糎）五〇冊ほどの書名を掲載。末尾に版元名「皇都書林／五条橋通柳馬場西入町 文林堂 菱屋亦兵衛／西六条花屋丁西洞院西入 文昌堂 永田調兵衛」

【刊年・刊行者】

元禄三年版を明和七年三月に再版。⑩七一ウの刊記は以下の通り。「元禄

三庚午年正月開板／明和七庚寅年三月求板／大坂書林／心齋橋筋順慶町／柏原屋清右衛門／同／河内屋茂八／柏原清右衛門は、姓は渋川氏で、称光堂と号し、心齋橋筋順慶町北入五丁目に店を構えていた。延宝七年版『難波雀』に載る「古本屋清右衛門」は同人のことと思われる。また河内屋茂八は、同じ大坂心齋橋筋の北久宝寺町通に店を構えていた書肆である。姓は伴氏で、菅生堂と号した。

また、広告に記載のある菱屋亦兵衛とは、文林堂と号した京都の書肆である。仏書の出版が比較的多いのが特徴で、のちに、弘化二年には、禅林寺、勸学院の御用書林株を取得している。そして、この菱屋と並べて記載されている永田調兵衛は、前述した通り、京都の書肆であるが、元禄三年版『古今著聞集』の元来の版元である。

【二五】古今著聞集 明和七年刊 一五冊

町田久成旧蔵「請求番号二一〇・〇一四一」

本書も前掲本同様、元禄三年に出版された『古今著聞集』を明和七年に再版したものである。ただし、本書は前掲本と異なり、刊記が大きく改められ、江戸の書肆四軒と大坂の書肆二軒が新たに版元として追加されている。これはおそらく、江戸で出版する際に江戸の書肆が版株を共有したことの表れであり、前掲本からさらにまた下った時期に本書が出版されたことを示している。

本書に特徴的なのは、貸本屋のものと見られる墨印と、又貸しを禁じる貼紙がされている点である。こうした痕跡を持つ本は珍しくはないが、あまり民間から献本されていない内閣文庫ではこのような本は比較的珍しい。

第一冊目の見返しの貼紙の内容は次の通りである。

「口上／一此本外方へ又かし之儀先／決して御行申候そこね候ては甚／めいわく候着ふんじついたし候節は／御氣之毒ながら御買取致さるべく候此段承知可被下候」

また、本書は町田久成の旧蔵書である。町田久成は書籍館の初代館長であり、書籍館創設に際して率先して蔵書を寄贈したらしい。国書・洋書ともにその数は多く、洋書に至っては留学の際に購入した貴重な本であった。本書には、町田久成の蔵書印である「石谷蔵書」と「町田久成献納之章」という二種の印がともに押されている。

なお、本書は改装されており、二〇冊だったものが一五冊の合冊になっている。函架番号と巻の対応は以下の通りである。

①巻一、②巻二、③巻三・四、④巻五、⑤巻六・巻七、⑥巻八、⑦巻九・巻十、⑧巻十一・巻十二、⑨巻十二、⑩巻十三、⑪巻十四・巻十五、⑫巻十六、⑬巻十七・十八、⑭巻十九、⑮巻二十

巻十二に関しては、一丁だけが第八冊目に綴じられ、残りの丁はすべて第九冊目になっている。改装の間違ひであると思われる。

【書誌】

外題・「古今著聞集 一（〜十五）」左肩四周双边刷題簽（一五・二糧×三・四糧）朱書で巻番号が書かれている。

内題・「古今著聞集」

表紙・改装縹色布目型押表紙（二二・〇糧×一五・五糧）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二八丁（四図）、②四五丁（二図）、③三七

丁（一〇図）、④六七丁（六図）、⑤六〇丁（二二図）、⑥三三丁（四図）、

⑦五一丁（二二図）、⑧三二丁（六図）、⑨三六丁（六図）、⑩二二丁（四図）、

⑪三七丁（八図）、⑫五六丁（四図）、⑬四七丁（八図）、⑭二四丁（六図）、

⑮四六丁（八図）

匡郭・四周单边（二六・二糶×一二・八糶）

印記・「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」「石谷蔵書」「安由」（楕円形墨印）「町田久成献納之章」（②一才）

備考・刊記部分のみ新刻。①②③⑥⑦⑩⑫⑬見返しに貸本屋の貼紙あり（八・八糶×五・七糶）。⑧朱書で頭註書入。⑮見返しに大坂・堺屋新兵衛の『新鑑草』の広告あり（一八・二糶×一二・二糶）

【刊年・刊行者】

⑮四六ウに前掲本と同一の「元禄三庚午年正月開板／明和七庚寅年三月求板／大坂書林／心齋橋筋順慶町／柏原屋清右衛門／同／河内屋茂八」という刊記がある。ただし、四七才に新しい丁が挿入されており、ここに新たな版元六軒が記載されている。その版元は以下の通り。

「書林／江戸日本橋通一丁目／須原屋茂兵衛／同日本橋通一丁目／山城屋佐兵衛／同浅草茅町二丁目／須原屋伊八／大坂南久宝寺町心齋橋南へ入／堺屋新兵衛／同順慶町心齋橋南へ入／堺屋定七」

須原屋茂兵衛は、江戸最大の書肆・須原屋の総本家にあたる。『武鑑』『江戸絵図』の版元として知られ、御用御書物師を務めた。万治年間に紀州有田郡栖原から移住し、元禄年間から営業を本格的に始め、明治三七年に店を閉じるまで三〇〇点近い版木を抱え多くの出版を行った。

須原屋伊八は、この茂兵衛に奉公後独立した書肆である。蘭学流行の時に乗り、蘭書を出版して店を繁盛させ、東叡山御用をも務めた。初代伊八は文化元年に死去、二代目伊八のとき、天保元年に火災に遭ってそれまで池之端仲町にあった店を浅草茅町に移したらしい。本書ではこの須原屋伊八の住所が浅草茅町となっている。天保元年の火事をきっかけに移転したとしたら、本書の出版は天保年間まで下ることになる。ただし、文化九

年の時点ですでに浅草茅町に店舗があったとみえ、嘉永頃まで池之端仲町と二店舗を同時に経営していた可能性もあるので、はっきりとはわからない。ただし、『新鑑草』の広告も載せている大坂の書肆・堺屋新兵衛は、もとは順慶町にあった店を弘化頃に南久宝寺に移している。本書の刊記では南久宝寺の住所が記載されているので、やはり本書の再版時期は天保弘化頃まで下るかもしれない。

山城屋佐兵衛は玉山堂と号した書肆で、須原屋茂兵衛と同じ日本橋に店を構えていた。書物、折手本問屋として記録が残る。堺屋定七は大坂・順慶町の書肆で、堺屋新兵衛と同系の書肆と思われる。

【二六】保元物語 貞享二年刊 三冊

内務省旧蔵「請求番号二一〇・〇一六九」

『保元物語』は三巻から成る軍記物語であり、『平治物語』『平家物語』『承久記』と共に「四部合戦之書」とも称された物語である。鳥羽天皇の皇位継承問題から勃発した保元の乱を、源為朝が自害して終結するまでの一部始終を描いている。敗者の視点にたつて悲劇的な語りを展開するのは他の軍記物と同様であるが、『保元物語』に特徴的なのは、為朝の超人的な剛勇ぶりで、鬼を従え伊豆七島を支配したり、たった一矢で敵の船を沈めるなど、伝説的な物語が記される点である。これは後世、為朝のイメージに多大な影響を及ぼした。

なお、作者・成立年代ともに未詳である。というのも、他の軍記物語同様、数多くの異本を持ち、それぞれ成立年代が異なっているため、成立年代や作者の検討が諸本ごとに必要なためである。

本書はそのうち、流布本と呼ばれる系統を、整版として出版したものに
 たる。流布本は諸本のうちでも成立は最も遅く、『太平記』とも深く関わり
 合うため、文安三年以後の室町時代にはおおよそ現在の形に整っていたと
 考えられている。

この流布本の系統には、慶長・元和・寛永に、それぞれ出版された古活
 字本がある。また、整版としては、寛永元年版片仮名交じり本、同三年版
 平仮名交じり絵入本、明暦三年版平仮名交じり絵入本、貞享二年版平仮名
 交じり絵入本、元禄一五年版平仮名交じり絵入本などを挙げることができ
 る。

本書には刊記は掲載されていないものの、出版は貞享二年であることが
 わかる。それは、本書が当館所蔵の貞享二年版『平治物語』〔請求番号一六
 七・〇〇三〇〕とツレであるためである。こちらの末尾には刊記が記され
 ているため、おそらく『保元物語』と『平治物語』各三冊をセットにして
 出版されたものであることが想像される。本書に限らず、『保元物語』と『平
 治物語』は姉妹編として、長年併称され版行されてきた。本書もそのうち
 のひとつにあたる。

本書は絵入の平仮名本である。本文・挿絵ともに先行する明暦三年版を
 参考にして作られたが、覆刻ではないので細部は異なっている。

本書の特徴としては、各冊、ほぼ同じ位置に規則的に挿絵が入れられて
 いる点や、版面の文字が小さく、二丁に一七行と過密である点である。(明
 暦三年版は一三行。)これは、同年代の古浄瑠璃正本に多く見られる特徴で、
 極力丁数を減らして、価格を安く設定しようとしたためである。

【書誌】

外題・「新板／絵入／保元物語 一(一三)」左肩無地料紙刷題簽(一八・
 二糶×三・六糶)

内題・「保元物語」

表紙・改装紺色表紙(二五・五糶×一八・五糶)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①二〇丁(六図)、②二五丁(六図)、③二二
 丁(七図)

匡郭・四周单边(二一・八糶×一六・五糶)

印記・「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」

「文齋書画記」(長方朱印)「存古堂図書記」(長方朱印)不明墨印二種あり。

備考・二種の不明墨印は貸本屋のものか。各冊とも冒頭の二ウ、三才は
 見開きの挿絵である。

【刊年・刊行者】

本書の末尾に刊記の記載はない。ただし、本書とツレと思われる『平治
 物語』(請求番号一六七・〇〇三〇)の末尾に、「貞享二年乙丑年九月吉辰
 /松樹軒/小川新兵衛開板」とあることから、本書もまた貞享二年刊行で
 あると判断される。

版元については、『平治物語』(請求番号一六七・〇〇三〇)の項で後述
 する。

【二七】平治物語 貞享二年刊 三冊

内務省旧蔵「請求番号一六七・〇〇三〇」

『平治物語』は前掲『保元物語』の姉妹編として併称されてきた軍記物
 語である。保元の乱ののち、院の近臣の藤原信頼と信西入道の政治的対立
 から、平治の乱が勃発し、やがて敗れた源義朝は謀殺され、ただ一人残さ
 れた源氏の嫡男の源頼朝が伊豆に配流されるところまでが描かれる。敗者

の視点から悲劇的な語りを展開し、また悪源太義平の活躍を超人的に描くところなどは、『保元物語』の語りや為朝像とかなり類似している。しかし、王権回復を言祝ぐ大団円を迎える『保元物語』とは違って、『平治物語』はやがて来る頼朝による関東制覇がほのめかされて終わる。この点はこの物語のあとに続く『平家物語』が大きく意識されており、『保元物語』『平治物語』『平家物語』という三部作構成によって歴史を展開しようという意図が働いている。

ただし、作者・成立年代は未詳である。他の軍記物語同様、異本が多く、加筆・改変も見られるため、諸説提唱されており現在もなお決着をみない。『保元物語』と同一作者であるとされてきたが、近年ではそれも疑問視されている。

本書は諸本のうち、流布本系にあたるテキストである。古活字版が慶長年間に出版されたのを皮切りに、寛永元年、同三年に整版が出版された。本書は貞享二年に出版された絵入平仮名本である。『保元物語』三冊と本書三冊、計六冊のセットで出版された。基本的には、先行する絵入平仮名本である明暦三年版を参考にしたと考えられているが、都立中央図書館が所蔵している延宝五年版と版式が酷似しており、直接的にはこれを覆刻あるいは模刻したものと考えられている。

本書は、前掲の『保元物語』と同一の印記があることからみて、前掲書のツレであることがわかる。また外題の冊数が「四」から始まっているのも、前掲の『保元物語』を一から三と数えたためである。版面の筆跡、挿絵の画風も前掲書と同一である。各冊にほぼ同じ位置に規則的な挿絵が入れている点も類似しており、計画的な編集作業が想像される。

【書誌】

外題・「新板／絵入／平治物語 四（〜六）」左肩刷題簽（一八・七糎×

三・五糎）

内題・「平治物語」

表紙・改装紺色表紙（二五・二糎×一八・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二五丁（八図）、②二五丁（八図）、③二五

丁（六図）

匡郭・四周单边（二一・八糎×一六・五糎）

印記・「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」「存古堂図書

記」（長方朱印）不明墨印二種あり。

備考・前掲本と同一の印記がある。③四丁目の丁付「四ノ五」となっており、飛び丁。

【刊年・刊行者】

③二五ウ本文末尾に刊記あり。「貞享二年乙丑年九月吉辰／松樹軒／小川新兵衛開板」とある。小川新兵衛という版元は、京・大坂・江戸の三か所に存在するが、松樹軒と号したのは、江戸日本橋萬町に店を構えていた小川新兵衛のみ。（なお、京の小川新兵衛は玉山閣）。したがって、本書は初期の江戸版である。文字が小さく行数も多い版面や、挿絵の様式は、貞享年間の特徴を表している。

ただし、貞享二年の刊記を持つ『平治物語』には、本書の松樹軒小川新兵衛版以外に安田十兵衛版と文臺屋治郎兵衛版の二種が存在する。版面の磨滅の程度などから見て、おそらく貞享二年当時最初に出版されたのは安田十兵衛版であろうという指摘がすでになされている。のちに版木を受け継いだ文臺屋治郎兵衛がさらに版を重ね、そしてさらにそのあとで本書の版元である小川新兵衛が求版したと思われる。

【二八】平家物語 明暦二年刊 七冊

教部省旧蔵「請求番号二〇三・〇一五三」

『平家物語』は中世に成立した最も代表的な軍記物語である。琵琶法師による口伝で主に広まったため異本が多く、同じ『平家物語』でも内容が異なる多くの写本が伝来する。しかし、いわゆる流布本と呼ばれる系統が、近世に入って出版されるにあたり、均一化されたイメージが人々に浸透した。平家の絶頂期から滅亡までを一二巻に描いたこの作品は、近世期を通して何度も出版され続けた。そこに題材をとった芝居も数えきれないほど作られ、屏風絵、絵馬、浮世絵にも描かれて、ついには近世の文化の一端を担うことになる。

本書はそういった『平家物語』の中でも、初めて絵入で出版された明暦二年版にあたる。『平家物語』はそれまで、古活字や整版で元和寛永年間中から正保年間にかけて平仮名本がようやく出版されるが、しかし、これらに挿絵はなく、それまで『平家物語』は、絵を楽しみながら読むものではないと考えられてきたようである。しかし、やがて出版文化が成熟するに従い、ジャンルに関わらず挿絵を入れるようになる。『平家物語』にもまた挿絵が入られるようになったのである。その最初が、本書にあたる。したがって本書の挿絵はすべて又丁である。時勢に応じた後補であった可能性が高いとされている。なお近世期の『平家物語』の絵入版本は、明暦二年版・寛文一二年版・延宝五年版・元禄一年版・元禄一二年版の五種類を基本とし、うち寛文一二年版と延宝五年版がそのうち幾度か再版されている。

本書は貸本屋のものとみられる墨印が多く見られ、多くの人々に読まれ

たと思われる。元来は一二冊本であるが、合冊されて七冊になっている。函架番号と巻名の対応は以下の通り。

- ①巻一、②巻二、③巻三・巻四、④巻五・巻六、⑤巻七・巻八、⑥巻九・巻十、⑦巻十一・巻十二

【書誌】

外題・「平家物語」左肩四周双边刷題簽（二六・四糎×三・二糎）

内題・「平家物語」

表紙・改装緑色表紙（二六・二糎×一八・七糎）

- 墨付丁数（うち挿絵枚数）・①五九丁（三〇図）、②六七丁（三二図）、③一七丁（五四図）、④一〇二丁（五二図）、⑤一〇九丁（六〇図）、⑥一四二丁（七二図）、⑦一三七丁（六八図）

匡郭・四周单边（二二・〇糎×一六・五糎）

印記・「教部省文庫印」「図書局文庫」（二種）「太政官文庫」「日本政府図書」「玉喜」（墨印三・〇糎×一・三糎）「市太」（墨印一・二糎×〇・八糎）「賢」（墨印一・二糎×一・〇糎）「万」（円形墨印）

備考・墨印はすべて各巻の巻頭にあるため、合冊される前に押されたもの。①鉛筆で書き入れあり。③挿絵に落書あり。袋綴じがすべて開いている。④版木の磨滅あり。⑤遊紙に改装前の紺色表紙の跡。⑦五八丁目の挿絵のみ版心に魚尾がある。

【刊年・刊行者】

刊記が一部削られているため、版元は不明。刊記は以下の通り。「此平家物語一方檢校衆以吟味令開板之者也／明暦貳年丙申九月吉日／霜月吉日」。明暦二年版には他に「霜月吉日」の部分の欠く版もある。

本書は刊記部分に、墨書で書き入れがある。「文政八酉年迄百七十年二成」というもので、本書が刊行された明暦二年から数えて、文政八年で一七〇

年経ったということらしい。明暦二年は西暦一六五六年、文政八年は西暦一八二六年である。文政八年当時の旧蔵者の書き入れであろう。

【二九】平家物語 刊年不明 一二冊

元老院旧蔵「請求番号一六七・〇〇四〇」

本書もまた前掲書同様『平家物語』の絵入平仮名整版本である。本文系統は流布本であり、前掲書と系統を一にするが、ただし、版式、筆跡、絵師などはすべて異なっている。刊記がないため、刊年および版元は不明であるが、その筆跡や挿絵の雰囲気からして元禄を下ることはないだろう。

国会図書館が所蔵する万屋清兵衛版の刊年不明本の後刷と思われる。

特徴的なのは一丁一五行と過密な点。見開きの挿絵が必ず巻のうちに一個所ある点は、前掲書と大きく異なる。強いていえば、前掲の貞享二年版『保元物語』『平治物語』と版式・画風は極めて似ている。

なお、本書は元老院の旧蔵書である。元老院は、左院に続いて設置された明治初期の立法機関である。明治八年から二十三年まで存続し、帝国議会の開設と共に廃止された。漢籍・国書ではおよそ六〇部ほどの本に押印されており、その内容は雑多である。

【書誌】

外題・「平家物語」左肩四周双边刷題簽に墨書

内題・「平家物語」

表紙・改装縹色表紙（二七・五糎×一九・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①四六丁（二六図）、②五三丁（二七図）、③

四六丁（一五図）、④四六丁（一六図）、⑤四二丁（二三図）、⑥三五丁（一

二図）、⑦四四丁（一六図）、⑧三六丁（二二図）、⑨五五丁（一九図）、⑩四七丁（一六図）、⑪五〇丁（二七図）、⑫五三丁（二八図）

匡郭・四周单边（二一・六糎×一六・三糎）

印記・「元老院図書記」「日本政府図書」

備考・①朱書、鉛筆で書き入れあり。②二七丁の丁付欠。

【刊年・刊行者】

刊記がないため不明。筆跡や挿絵の雰囲気から察するに元禄を下ることはないと思われる。

【三〇】平家物語 天和二年刊 一二冊

内務省旧蔵「請求番号一六七・〇〇三七」

本書は前掲書と同じ系統の本文を持つ『平家物語』版本であるが、天和二年に刊行されたもの。寛文一二年版の再版で、刊記のみ入木で差し替えられた。そのため、やや版木の磨滅が目立つ。

挿絵は一丁の表裏に一図ずつ配してある。本書ではこの挿絵が主に各冊に二丁（四図）ずつ入れられているが、本文の内容と挿絵の位置は必ずしも一致していない。また落丁も多い。天和二年版は、版によって挿絵の位置や枚数が異なっており、本書もその例に漏れない。

本書は明治一四年に内務省が買い求めた。

旧蔵者の記録はないが、元の持ち主の手によるものと見られる落書が各所に見られる。

【書誌】

外題・「新板／平家物語 一（十二）」左肩四周双边刷題簽（一七・三

糶×四・〇糶)

内題・「平家物語」

表紙・原装青鈍色表紙 (二五・五糶×一八・五糶)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①四四丁(四図)、②五二丁(四図)、③四六丁(四図)、④四二丁(四図)、⑤四〇丁(四図)、⑥三二丁(四図)、⑦三九丁(二図)、⑧三四丁(四図)、⑨五二丁(四図)、⑩四二丁(四図)、⑪四三丁(四図)、⑫四七丁(四図)

匡郭・四周单边 (二二・〇糶×一六・七糶)

印記・「大日本帝国図書印」「明治十四年購求」「日本政府図書」「書林／池孫」(三・六糶×一・九糶)

備考・②見返に落書。挿絵には台詞を書き込む落書。③裏表紙に落書。

④裏見返に落書。ただし修復の際に上から紙を貼っている。⑤裏見返に落書。⑥裏見返に落書。

【刊年・刊行者】

刊記は⑫四七ウに「天和壬戌年六月吉日／開板」とある。寛文一二年版に入木で差し替えている。ただし、④裏見返に墨書で版元名の落書があるので、以下に記す。

「書林／紀州若山藩坂本屋大次郎／尾州宝棒町河内屋源助／大坂弁財福通和泉屋末助／京都二条通玉屋七郎兵衛」

いずれの書肆も『平家物語』の版元であった記録はなく、別の本の刊記を写しただけの落書と思われる。ただし、冒頭の坂本屋大次郎は幕末期にいくつか出版を手掛けた記録が残り、また、他の箇所落書にも「若山」の文字が見えることから、落書をした旧蔵者は、幕末期の和歌山に居住していた人物であると想像ができる。

【三一】平家物語 天和二年刊 一一冊

外務省旧蔵「請求番号二〇三・〇一五一」

本書は前掲の天和二年版と同版本であるが、挿絵の位置や枚数が大きく異なっている。版木の磨滅の程度から察するに、本書のほうが前掲本よりも後に刷られたと想定されるが、版を重ねるたびに挿絵の位置や枚数が修正されたのだろう。

一部水損が見られ、状態はあまり良くない。修復される以前に、表紙がない状態のまま放置されていた期間があったようだ。

本書は前掲本同様、一二巻一二冊であるが、巻八を欠いている。

なお、本書は外務省の旧蔵書である。外務省から太政官文庫に移管され、現代に引き継がれた。外務省はかつて膨大な数の資料を所蔵しており、シーボルト献納本や、在外公使館の所蔵図書などを含むためにその範囲も和漢洋と多岐に渡った。

本書に押印されている篆書体の印記は、中でも最も多くの資料に押印されたものである。

【書誌】

外題・「平家物語 巻(十二)」(ただし巻八欠) 四周双边刷題簽に墨書 (一七・三糶×三・八糶)

内題・「平家物語」

表紙・改装山吹色表紙 (二六・〇糶×一八・〇糶)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①四三丁(四図)、②五二丁(六図)、③四七丁(六図)、④四二丁(四図)、⑤四〇丁(二図)、⑥三二丁(二図)、⑦四一丁(六図)、⑧五二丁(四図)、⑨四二丁(四図)、⑩四二丁(二図)、⑪四八丁(六図)

匡郭・四周单边（二二・〇糎×一六・七糎）

印記・「太政官文庫」「日本政府図書」「外務省図書記」（篆書体正方印）

備考・①三丁欠、⑧巻九、錯簡あり。⑨裏表紙。ペン書きで落書あり。

【刊年・刊行者】

刊記は前掲本と同一で⑩四八ウに「天和式壬戌年六月吉日／開板」とある。版元は不明。

【三二】源平盛衰記 延宝八年刊 四八冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号一六七・〇〇四三」

『源平盛衰記』は平安末期の源平合戦（治承・寿永の乱）を描いたもので、ほぼ『平家物語』と内容を一にするが、大幅に増補されて全体で四八巻の大部であること、また、源氏側の視点で物語を展開する箇所があるなど『平家物語』とは大きく違っている点も多い。そのためかつては、『平家物語』とは全く別の作品であると考えられていた。しかし、現在では、延慶本『平家物語』との類似点から『平家物語』から派生した広本系のテキストとして位置づけられている。

成立年代については諸説あるが、『義経記』『太平記』との類似点や、『徒然草』との関連などからおおよそ南北朝時代と想定されている。長らく写本で享受されたが、特に読者層を広げたのは出版が始まった近世期で、歌舞伎などの芝居に様々な材料を提供して大きな影響を及ぼした。読本作家にも『太平記』に次ぐ必須の教養とされ、多くの作品に典拠として引用されている。また、公には中国の『史記』や『資治通鑑』に匹敵する歴史書であると認識されており、幕府や多くの国学者が典拠を示すことなく引用

をしている。近世期を通して非常に重要視された資料であった。

まず慶長、元和、寛永と、古活字版が出版され、その後、整版としても版を重ねたが、基本的には片仮名本で挿絵はなかった。これは前項でも述べたように、絵入本としてはふさわしくない作品と考えられていたためである。しかし時代の流れから明暦二年版に初めて挿絵が入られると、寛文五年版から平仮名整版本となり読者層を広げた。

本書は、その寛文五年版の覆刻版である延宝八年版にあたる。

本書は寛文五年版同様、挿絵部分に丁付がない。その代わり、挿絵の直前の頁の本文の丁付は「〇次絵」となっており、製本時に挿絵位置を誤らないように十分に留意されながら製作されたことがわかる。元来は、目録一冊を足した全四九冊であったが、本書は目録と巻一が合冊されている。

なお本書は昌平坂学問所の旧蔵本である。昌平坂学問所の受け入れ印である「文政丙戌」の印が押印されていることから、文政九年（一八二六年）に新収したことがわかる。

改装修理を何度か加えられているが、一部に、昌平坂学問所に収蔵された際の表紙が残っている。

【書誌】

外題・「源平盛衰記 一（〜四十八）」左肩四周双边題簽（一八・三糎×三・七糎）

内題・「源平盛衰記」

表紙・改装紺色表紙（二七・〇糎×一九・七糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・第一冊五〇丁（一六図）、第二冊四三丁（二四図）、第三冊六五丁（三四図）、第四冊六四丁（三六図）、第五冊五五丁（二四図）、第六冊五五丁（二四図）、第七冊五〇丁（二八図）、第八冊四八丁（二四図）、第九冊五七丁（二八図）、第一〇冊五七丁（二八図）、第一一冊七〇

丁(三四図)、第一二冊五二丁(二六図)、第一三冊四七丁(二四図)、第一四冊五〇丁(二八図)、第一五冊五七丁(三〇図)、第一六冊五〇丁(二四図)、第一七冊六六丁(三五図)、第一八冊五四丁(二五図)、第一九冊四七丁(二七図)、第二〇冊五〇丁(二九図)、第二一冊三八丁(二二図)、第二二冊四三丁(二六図)、第二三冊四九丁(二六図)、第二四冊五〇丁(二二図)、第二五冊五〇丁(二八図)、第二六冊五九丁(三七図)、第二七冊四七丁(二八図)、第二八冊五六丁(三四図)、第二九冊四五丁(二六図)、第三〇冊四六丁(二四図)、第三一冊四六丁(二六図)、第三二冊五二丁(二四図)、第三三冊六六丁(四〇図)、第三四冊六三丁(三二図)、第三五冊七一丁(四〇図)、第三六冊五三丁(二六図)、第三七冊五六丁(三〇図)、第三八冊五三丁(二四図)、第三九冊五九丁(三〇図)、第四〇冊五八丁(三二図)、第四一冊五二丁(二八図)、第四二冊六〇丁(三四図)、第四三冊五七丁(三二図)、第四四冊五三丁(二六図)、第四五冊五八丁(三〇図)、第四六冊六一丁(三六図)、第四七冊五〇丁(三二図)、第四八冊五一丁(一八図)

匡郭(本文)・四周单边(二一・四糎×一七・三糎)、

匡郭(挿絵)・四周单边(二〇・二糎×一六・三糎)

印記・「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」「昌平坂学問所」「文政丙戌」「イセ治」(楳田陽刻印一・七糎×〇・九糎)

備考・第一冊・外題のみ題簽に墨書。三三丁まで目録、三四丁から本文開始。裏表紙のみ横刷毛目表紙。昌平坂学問所の印記の裏写りがあるため、改装以前の表紙力。第六冊・裏表紙のみ横刷毛目表紙。第一一冊・最終七一丁に遊紙。第三七冊・四四丁の袋綴じが開いており、あいだに四五丁目が挿入されている。

【刊年・刊行者】

第四八冊五一ウの刊記は以下の通り。

「延宝八庚申六月吉日／東洞院通六角下町／山口忠右衛門富次／開板」山口忠右衛門は京の書肆で、仏書を多く手がけていた。延宝八年に本書を出版してのち、元禄一四年に再び注釈絵入の『源平盛衰記』を出版している。

本書の「イセ治」という印記は、伊勢屋治兵衛という人物のもの。詳細は不明であるが、同一の印が押されている元禄七年版『公武栄枯物語』(請求番号一六七・〇〇五〇)に、「巢鴨原街之住／伊勢屋治兵衛／蔵書」という署名がある。

なお「文政丙戌」の小型朱印は、寛政一〇年以降に、昌平坂学問所が新収書に押した受入印の一つである。「寛政戊午」から始まり「慶応戊辰」で終わる。すべての蔵書に押印されたわけではなく、取扱の乱れがあったのか例外が多い。

【三三】源平盛衰記 宝永四年刊 一二冊

内務省旧蔵「請求番号一六七・〇〇四八」

本書は宝永四年に刊行された『源平盛衰記』の絵入平仮名整版本である。元禄一四年に横型整版本で出版された例を踏襲し、本書も縦一二・八糎×横一九・〇糎の横型絵本として出版された。横型整版本の出版は、元禄年間前後に最盛期を迎え、『源平盛衰記』の他にも『源氏物語』や『太平記』などが出版されている。

豊富な挿絵が特徴的で、特に合戦場面に関しては見開きの挿絵を何箇所も載せる。一一・一糎×一七・三糎の小さな版面であるが、掲載された挿

絵は比較的細緻である。

全四八巻を、三巻ずつ仕立てて全部で二二冊となっている。第一冊目に総目録が載る。丁付はすべて巻ごとに「一」から始まっている。

【書誌】

外題・「源平盛衰記」左肩無地料紙題簽（一〇・六糶×二・三糶）

内題・「源平盛衰記」

表紙・改装紺色表紙（二二・八糶×一九・〇糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一三八丁（二二図）、②一一九丁（二二図）、③一三二丁（二三図）、④一二二丁（二三図）、⑤一三九丁（二七図）、⑥一五五丁（二〇図）、⑦一三五丁（二六図）、⑧一三五丁（二九図）、⑨一七七丁（四〇図）、⑩一五二丁（三〇図）、⑪一四四丁（三八図）、⑫一四二丁（二七図）

匡郭・四周单边（一一・一糶×一七・三糶）

印記・「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」「□□□□」

（不明印記・正方陰刻印）

備考・半丁一八行。⑩一一二丁目にしおりあり。

【刊年・刊行者】

刊記は⑫四八ウに以下の通りある。

「宝永四丁亥年／季春／額田勝兵衛／同姓正三郎／舎梓」

額田勝兵衛は、京麩屋町仏光寺下ルに店を構えていた書肆で、白話小説や軍談を手掛けていたことが記録に残る。「同姓正三郎」とは、同系の書肆・額田正三郎のことで、別に伊勢屋正三郎、あるいは九草堂とも号した。額田一止人とも。はじめは寺町通五条上ル西に店を構えていたが、のち五条西橋詰町に移転している。俳人としても名を残しており、俳号は九十九庵文下。寛文頃から営業を始めたらしく、明治一五年版『日本蒙求続編』に

も名前が載ることから、近世を通して長く続いた書肆であったことがわかる。

【三四】曾我物語 貞享四年刊 七冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特〇六七・〇〇〇二」

『曾我物語』は、十郎祐成と五郎時致の二人の兄弟が、長年の艱難辛苦の末、父の仇である工藤祐経を富士野の巻狩で討ち果たす物語である。

源頼朝の政権下、その右腕といっても過言ではなかった鎌倉幕府の重臣の工藤祐経が曾我兄弟に殺害された実際の事件に取材している。成立年代や作者については諸説あるが、基本的には、五郎を御霊とみなし、盲目の巫女たちがその鎮魂のために語った語り物が基礎となったと考えられている。本文系統には、真名本・大石寺本・仮名本の三系統があり、内容・構成・主題に大きな違いがあることから、『曾我物語』が語りを媒介とした複雑な生成過程を辿ってきたことを示している。そしてさらに、『曾我物語』のテキストだけでなく、そこから派生した幸若舞・古浄瑠璃などの芸能も流行した。

特に『曾我物語』仮名本系諸本は出版されるようになってから庶民に爆発的な人気を持って迎えられる。浄瑠璃や歌舞伎の芝居となったことが最大の要因であった。草双紙や読本にも繰り返し描かれるモチーフとなり、近世文化史を語る上では無視することはできない。

したがって『曾我物語』は近世期を通して数種類の版が出版されている。古活字版、寛永四年版、正保三年版、寛文三年版、寛文一一年版、貞享四年版、元禄一一年版、元禄一四年版、寛延二年版などである。本書はこの

うちの貞享四年版に相当するが、延宝四年松会版の年記部分を入木修正したものの。いずれも一二巻一二冊で出版されたが、本書に関しては元来、一二冊であったものを合冊して七冊に直してある。函架番号と巻の対応は以下の通りである。

①巻一、②巻二・巻三、③巻四・巻五、④巻六・巻七、⑤巻八、⑥巻九・巻十、⑦巻十一・巻十二

『曾我物語』は比較的古い段階から絵入本として享受され、最初に絵入で出版されたのは正保三年版である。その後はほとんどが絵入で出版されているが、本書の挿絵は寛文三年版からの転用である。豊富な挿絵が特徴で、巻一・巻八には、見開きで挿絵が四図連続する箇所もある。

絵師については不明だが、当館所蔵の無刊記版『平家物語』『請求番号一六七・〇〇四〇』と同一と思われる。師宣風の画風。版式はやや異なるが、筆跡・挿絵ともに近似しており、行数や匡郭の大きさも同一であることから、同じ人物が製作に関わっていると想定される。

また、本書は紅葉山文庫の旧蔵本にあたる。何度か改装修理はされているものの極めて状態がよく、日焼けや破損もなく、虫もほとんど入っていない。錯簡、落丁もない。印記の押印もないのは、紅葉山文庫本には蔵書印を押さない伝統があったためで、現在は見返しに蔵書表が付されているのみとなっている。

【書誌】

外題・「曾我物語」左肩四周双边刷題簽（二六・八糎×三・六糎）

内題・「曾我物語」

表紙・改装縹色表紙（二六・五糎×一八・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①四〇丁（二〇図）、②四七丁（二七図）、③五八丁（二〇図）、④四九丁（二七図）、⑤二六丁（一一図）、⑥四二丁（一

五図）、⑦三二丁（一一図）

匡郭・四周单边（二一・五糎×一六・五糎）

印記・「日本政府図書」（蔵書表）

備考・遊紙一丁。半丁一五行の江戸版様式。

【刊年・刊行者】

⑦三二ウの刊記は以下の通り。

「貞享四丁卯三月日／松会新板」

いわゆる松会版である。時期から考えて三代目松会三四郎の手によるものか。延宝四年刊の松会版の年記部分を入木して修正したもの。

【三五】曾我物語 元禄一四四年刊 一〇冊

内務省旧蔵「請求番号二〇四・〇〇一二」

本書は前掲書と同様、近世期に出版された『曾我物語』の絵入整版本である。『曾我物語』の絵入整版本は主に、正保三年版、寛文三年版、寛文一四一年版、貞享四年版、元禄一四一年版、元禄一四四年版、寛延二年版の七種とされるが、本書はこのうちの元禄一四四年版に相当する。元禄一四四年版も他の版と同様に、一二巻一二冊で刊行されたが、本書は合冊されて一〇冊に直されている。函架番号と巻の対応は以下の通り。

①巻一、②巻二、③巻三、④巻四、⑤巻五、⑥巻六、⑦巻七、⑧巻八、⑨巻九・巻十、⑩巻十一・巻十二

挿絵は、寛文一四一年版の求版後刷である。しかし、挿絵の数は少なく、位置も異なる。これは、寛文三年版以降の整版本に見られる特徴で、時代が下るほどに挿絵の枚数が減り、該当本文と挿絵の間隔が大きくなる傾向

にある。

本書も含め、寛文三年版以降の五種の整版本は、すべてが寛文三年版の模倣ないし後刷である。そのため、多くが版元名を欠く。本書もその例に漏れない。幕末まで刷を重ねていたようである。

本書は明治一三年に内務省が購入したもの。旧蔵者は不明であるが、残された墨印からかつては下総の本屋のもとにあつたと想像される。

【書誌】

外題・「曾我物語」 四周双辺刷題簽に墨書（一六・七糎×三・一糎）

内題・「曾我物語」

表紙・改装縹色表紙（二五・三糎×一八・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①四七丁（二六図）、②三〇丁（八図）、③二五丁（六図）、④二九丁（六図）、⑤三八丁（八図）、⑥二八丁（八図）、⑦二九丁（六図）、⑧三〇丁（八図）、⑨五二丁（二〇図）、⑩三四丁（八図）

匡郭・四周単辺（二一・三糎×一六・五糎）

印記・「大日本帝国図書印」「明治十三年購求」「六四四三」「下総／秀渡邊／花嶋」（円型墨印直径二・八糎）

備考・朱印「六四四三」は内務省購入当時の函架番号。⑩外題が「曾我物語 十一」となっている。

【刊年・刊行者】

⑩三四ウの刊記は以下の通り。

「此拾式□諸本見合誤正シ重而今板行畢／元禄十四辛巳年下春良日」

これによれば元禄十四年三月の刊行であるが、版元の記載がないため刊行者は不明。□部分虫入り。

【三六】義経記 寛文一〇年刊 八冊

紅葉山文庫旧蔵「請求番号特〇四四・〇〇三」

『義経記』は、源義経の生涯を描いた一代記的な軍記物語である。ただし物語は幼少期を描いた前半部分と晩年の後半部分の二部構成になっていて、最も華やかであるはずの源平合戦で活躍する部分はわずかしか記述がない。これはおそらく『平家物語』に詳しい記述があるため、そこに描かれることのなかつた私人としての義経を補って描こうとした結果、このような構成になったと考えられる。

基本的には、鞍馬寺へ預けられてから奥州平泉へ身を寄せるまでの前半生と、頼朝に追われて再び奥州平泉へと逃れるものの藤原泰衡に討たれてその生涯を終えるまでが描かれる。だが、ここにさらに様々な伝説的・説話的エピソードが加えられているため、辻褄が合っていない部分もある。これは、当時全国に流布していた様々な義経伝説を、作者が一つの物語にまとめて集録しようとしたためにできた齟齬だと考えられている。この材料となった様々な伝説はおそらく鎌倉時代には発生していたと考えられるが、それが『義経記』として一つの作品として構成されたのは、室町時代であったと考えられている。ただし作者に関しては一切の史料を欠いており、不明である。

『義経記』は後世の文学作品に多大なる影響を及ぼした。顕著なのは、謡曲・幸若・浄瑠璃などの語り物芸である。これらには『義経記』に題材をとった「判官物」と称されるジャンルが存在し、また浄瑠璃に至ってはその源流である『浄瑠璃御前物語』がまさに義経伝説に取材したもので、判官物は最も主要なテーマであった。

こうして近世に「判官物」が芝居にかかるようになると、『義経記』も大

量に出版されるようになる。まず、慶長・元和年間刊行の一行古活字版が出版され、以下、寛永一〇年版、寛永一二年版、正保二年版、正保三年版、万治二年版、寛文三年版、寛文四年版、寛文一〇年版、寛文一三年版、元禄二年版、元禄一〇年版など、数えきれないほど幾度にも渡って出版され続けた。『義経記』には古い時代の写本がなく、現存する写本はすべて版本の写しであると考えられている。そのため『義経記』の版本テキストは非常に重要である。

本書はこの『義経記』の版本のうち寛文一〇年版に相当する。

本文は寛永一〇年版の系統であるが、新たに版下を起こしている。挿絵は寛文四年版の絵の上部に霞などを足して匡郭の大きさを変えたもの。八巻八冊で構成されるが、それぞれに一〇枚前後の挿絵が規則正しく挿入されている。本書の場合、状態が極めて良い。ただし、版によって挿絵に入りがある。本書の場合は巻二に一図増補されており、巻八では一図欠けている。国会図書館所蔵の本と比較すると、本書のほうはやや前の刷りと思われる。

なお本書は紅葉山文庫の旧蔵本である。

【書誌】

外題・「新板／義経記 一（〜八）」左肩四周双边刷題簽（一八・〇糎×三・九糎）

内題・「義経記」

表紙・改装縹色表紙（二六・八糎×一九・九糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一九丁（八図）、②三四丁（二二図）、③二八丁（八図）、④四二丁（二二図）、⑤四二丁（一〇図）、⑥四三丁（二二図）、⑦四五丁（二二図）、⑧二二丁（六図）

匡郭・四周双边（二一・四糎×一六・七糎）

印記・「日本政府図書」（蔵書表と印）

備考・④朱で書き入れあり。

【刊年・刊行者】

刊記は⑧二二ウに以下の通り記載がある。

「寛文拾庚戌初夏／吉野屋惣兵衛板」

刊行は寛文一〇年四月で、版元は吉野屋惣兵衛である。吉野屋惣兵衛は、京の書肆で寛文から元禄にかけての出版物が残る。芳野屋総兵衛とも。

【三七】太平記 刊年不明 四一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号一六七・〇〇六四」

『太平記』は南北朝の動乱を描いた軍記物語で、『平家物語』と並ぶ歴史文学である。

後醍醐天皇の鎌倉幕府倒幕計画から始まり、楠木正成ら悪党たちの活躍、北条得宗家の最期、足利・新田の対立、そして、室町幕府内部の対立、観応の擾乱の顛末まで、半世紀に渡る全国各地の内乱を俯瞰的に描いている。『平家物語』に比べ叙情性に欠くとされるが、時に批判的な考察も加えながら叙述する手法は当時の散文文学の画期であった。そういった現実に立脚した展開から貴重な史書として価値を見出され、室町時代から大いに享受された。成立年代は諸説ありはつきりしないが、概ね応安年間末から永和年間にかけてとするのが有力な説である。作者として記録に残る名前は「小島法師」という人物だが、来歴は不明。異本の数からしても、二〇年以上の長きに渡り多数の作者によって書き継がれ改訂されて現存の形となったと考えるのが妥当であるとされる。

室町時代から、『太平記』の影響下に様々な軍記が制作され、またインド・中国・日本の故事を多く収録していたことから類書としても活用された。そしてこういった付加的説話は、謡曲や幸若舞などの芸能にも多く題材を提供した。戦国時代においては、武将たちに政治・兵法の指南書として受け入れられ、やがてそれが講釈師の手によって巷間に流布するようになる。と一気に一般庶民へと広がっていった。

近世期に入ると、仮名草子を始めとする散文文学、浄瑠璃・歌舞伎などの芝居にも大きく影響。幕末・明治に至るまで、『太平記』に取材したり、それを展開させた物語は、数限りなく生産されたのである。

近世期に入って、出版されるようになった『太平記』の本文は、梵舜本を改めた流布本系統である。別系統の諸本を取り合わせた梵舜本から、重複記事などを削除して平易に改めたものと想定されている。慶長七年に古活字版が出版され、以降、数種類の古活字版が出版された。そして整版として最初に出版されたのは元和八年である。以降、元禄年間前後をピークに大量の版が出版された。

本書は仮名交じりの本文に挿絵を入れた大本である。刊記を欠いているため正確な刊年は不明だが、挿絵・文字・版式などからみて出版は明暦から寛文ころと想定される。絵入の整版本としては早い段階に位置づけることができるものである。四〇巻四〇冊に、総目録と剣巻を併せた一冊が追加されて、全四一冊で出版された。国会図書館や静嘉堂文庫、宮内庁書陵部などが同版本を所蔵しており、現存点数は多い。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵本である。昌平坂学問所の受け入れ印である「文政丙戌」の印が押印されていることから、文政九年（一八二六年）に新収したことがわかる。表紙は青鈍色の表紙に銀泥で草花の文様が施され、見返しは雲母引きに金の切箔が施されている豪華なものである。

こういった表紙が版本の表紙となる例は珍しく、豪華写本に次ぐ格のものにあたる。

【書誌】

外題・「太平記」左肩金銀切箔料紙刷題簽（一八・六糎×四・〇糎）

内題・「太平記」

表紙・原裝青鈍色地銀泥草花文様表紙（二六・五糎×一九・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・第一冊（総目録・剣巻）七五丁（四二図）、

第二冊（巻一）三七丁（二〇図）、第三冊（巻二）六一丁（三六図）、第四冊（巻三）四三丁（三三図）、第五冊（巻四）五三丁（三六図）、第六冊（巻

六）四〇丁（二〇図）、第七冊（巻五）三五丁（二二図）、第八冊（巻七）

四四丁（二〇図）、第九冊（巻八）五八丁（三四図）、第一〇冊（巻九）五

九丁（三二図）、第一一冊（巻一〇）七六丁（五二図）、第一二冊（巻一一）

四二丁（一八図）、第一三冊（巻一二）六二丁（二六図）、第一四冊（巻一

三）五〇丁（三二図）、第一五冊（巻一四）八一丁（四八図）、第一六冊（巻一

五）六〇丁（三四図）、第一七冊（巻一六）八六丁（四六図）、第一八冊

（巻一七）九七丁（四六図）、第一九冊（巻一八）八七丁（四四図）、第二

〇冊（巻一九）五〇丁（二六図）、第二一冊（巻二〇）六二丁（三二図）、

第二二冊（巻二一）五九丁（三四図）、第二三冊（巻二二）四六丁（二六図）、

第二四冊（巻二三）三七丁（一八図）、第二五冊（巻二四）六五丁（三四図）、

第二六冊（巻二五）四六丁（二八図）、第二七冊（巻二六）七七丁（四六図）、

第二八冊（巻二七）五七丁（三六図）、第二九冊（巻二八）五八丁（四〇図）、

第三〇冊（巻二九）六六丁（三八図）、第三一冊（巻三〇）五〇丁（三二図）、

第三二冊（巻三一）五七丁（三二図）、第三三冊（巻三二）七四丁（四八図）、

第三四冊（巻三三）七〇丁（四二図）、第三五冊（巻三四）五五丁（三〇図）、

第三六冊（巻三五）六八丁（三八図）、第三七冊（巻三六）五四丁（三四図）、

第三八冊(卷三七)五六丁(三六図)、第三九冊(卷三八)六五丁(三八図)、第四〇冊(卷三九)七三丁(四四図)、第四一冊(卷四〇)二八丁(二〇図) 匡郭・四周单边(二一・三糎×一八・〇糎)
 印記・「昌平坂学問所」「文政丙戌」「大学校図書之印」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・第一冊目(総目録・剣巻)一丁〜一八丁まで「総目録」、一九丁〜七五丁まで「剣巻」、朱書入あり。第二冊目(卷二)朱書入あり。ふりがな、訓点など。第三冊目(卷二)改装緑色表紙。挿絵に落書あり。第四冊目(卷三)朱書入あり。校合など。第五冊目(卷四)裏見返に落書。第六冊目(卷六)見返はがれ。第六冊目(卷六)と第七冊目(卷五)が順序転倒したまま配架。第一冊目(卷一〇)題簽下半分はがれ。朱で打付書き「十」。第一八冊目(卷一七)題簽一部はがれ。第二冊目(卷二〇)朱で挿絵落書。第二五冊目(卷二四)題簽下半分張り替え。第二八冊目(卷二七)題簽上半分はがれ。第三〇冊目(卷二九)一四丁目刷りに欠けあり。第三八冊目(卷三七)見返張り替え。第四〇冊目(卷三九)題簽・表紙・裏表紙下半分はがれ。第四一冊目(卷四〇)改装緑色表紙。二八丁目錯簡。

【刊年・刊行者】

刊記を欠くため、刊年・刊行者ともに不明だが、明暦から寛文頃の出版と想定される。ただし、巻四〇の末尾に筆耕と思われる署名がある。記載は以下の通り。

「太平記巻第四十終 此一部之筆者者里兵衛書之」(二八才)

【三八】 太平記 刊年不明 四一冊

内務省旧蔵「請求番号一六七・〇〇六四」

本書は前掲本と同版の明暦寛文頃無刊記本『太平記』である。第一冊目に「総目録」と「剣巻」を置き、四〇巻四一冊で出版されたもの。

前掲本と大きく異なるのは表紙と大きさである。おそらく前掲本は表紙をつけかえられており、なおかつ本書も改装されているので異なってしまうものと思われる。

版面の磨滅の程度から推測すると、本書のほうはやや先に刷られたものか。

本書は明治一二年に内務省が購入したものである。

【書誌】

外題・「太平記」左肩無地料紙刷題簽(二八・八糎×三・七糎)

内題・「太平記」

表紙・改装紺色表紙(二七・〇糎×一九・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・第一冊(総目録・剣巻)七五丁(四二図)、第二冊(卷一)三七丁(二〇図)、第三冊(卷二)六一丁(三六図)、第四冊(卷三)四三丁(二三図)、第五冊(卷四)五三丁(三六図)、第六冊(卷六)四〇丁(二〇図)、第七冊(卷五)三五丁(二二図)、第八冊(卷七)四四丁(二〇図)、第九冊(卷八)五八丁(三四図)、第一〇冊(卷九)五九丁(三二図)、第一一冊(卷一〇)七六丁(五二図)、第一二冊(卷一一)四二丁(一八図)、第一三冊(卷一二)六二丁(二六図)、第一四冊(卷一三)五〇丁(三二図)、第一五冊(卷一四)八二丁(四八図)、第一六冊(卷一五)六〇丁(三四図)、第一七冊(卷一六)八六丁(四六図)、第一八冊(卷一七)九七丁(四六図)、第一九冊(卷一八)八七丁(四四図)、第二

○冊(巻一九)五〇丁(二六図)、第二冊(巻二〇)六二丁(三二図)、第二冊(巻二一)五九丁(三四図)、第三冊(巻二二)四六丁(二六図)、第二冊(巻二三)三七丁(二八図)、第二冊(巻二四)六五丁(三四図)、第二冊(巻二五)四六丁(二八図)、第二冊(巻二六)七七丁(四六図)、第二冊(巻二七)五七丁(三六図)、第二冊(巻二八)五八丁(四〇図)、第三〇冊(巻二九)六六丁(三八図)、第二冊(巻三〇)五〇丁(三二図)、第三二冊(巻三一)五七丁(三二図)、第三冊(巻三二)七四丁(四八図)、第三四冊(巻三三)七〇丁(四二図)、第三五冊(巻三四)五五丁(三〇図)、第三六冊(巻三五)六八丁(三八図)、第三七冊(巻三六)五四丁(三四図)、第三八冊(巻三七)五六丁(三六図)、第三九冊(巻三八)六五丁(三八図)、第四〇冊(巻三九)七三丁(四四図)、第四一冊(巻四〇)二八丁(二〇図) 匡郭・四周単辺(二一・三糎×一八・〇糎)

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」

備考・第二冊目(巻一)朱書入あり。第三冊目(巻二)朱書入あり。第二八冊目(巻二七)題簽一部はがれ。前掲本で転倒している巻序が訂正されており、錯簡部分もない。

【刊年・刊行者】

前掲本同様、刊記を欠く。奥書に同一署名あり。

「太平記巻第四十終 此一部之筆者者里兵衛書之」(二八才)

【三九】太平記理尽図経 明暦二年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号一六七・〇〇九一」

『太平記理尽図経』は『太平記』の内容を略述し、兵法・政治の参考書

となるべく解釈と挿絵とを付け加えたものである。この場合の挿絵とは、前掲の絵入版本の『太平記』とは異なり、物語の一場面を描くのではなく、その場面の兵の配置や陣形、戦場の地形などを描く。そのため、半丁に一図とは限らず、本文中にも簡単な絵が挿しこまれていることもある。これは、兵法書として『太平記』の世界を解説し、当時の戦闘をわかりやすく解説しようとしたためである。

そもそも原型となった本は『太平記評判秘伝理尽鈔』である。『太平記』を略述し、そこに注釈、評、伝などを書き加えた兵法と政道の参考書で、近世初期には講師たちがこの本を使って大名やその家臣を対象にした講釈を行った。そして近世前半には太平記読という芸能のひとつとして成立し、庶民を相手にした娯楽的な軍談講釈のさきがけとなって流行する。

本書はこの『太平記評判秘伝理尽鈔』の影響下に成立した。内容は『太平記評判秘伝理尽鈔』より平易。本文は漢字片仮名交じり文。金沢市立図書館津田文庫が所蔵する写本には、成立に関する記載が記されており、それによれば『太平記理尽図経』は、本多政重の命により大橋貞清が編纂したという。最大の特徴が、陣形を图示するなど多くの挿絵を掲載している点である。本書の挿絵は手彩色で、青、赤、緑、黄の四色が使用されている。

本書は昌平坂学問所の旧蔵本であるが、中でも特に記録調所の蔵書であった。記録調所は徳川家の創業史の編修を目的に設置されたため、近世の史書・記録を多く収集していた。これらの本には「昌平坂学問所」の印は押さず、「昌平坂」の墨印を押し、「番外書冊」の墨印と併用する場合が多かった。本書はその中の一つに相当する。

【書誌】

外題・「太平記図経」左肩四周双边刷題簽(一七・七糎×三・七糎)※①

②⑤題簽欠。②墨書打付「太平記図経」

内題・「太平記理尽図経」

表紙・改装紺色表紙（二七・八糎×一九・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二五丁（二八図）、②二五丁（二五図）、③

二六丁（一二図）、④二三丁（二六図）、⑤一八丁（一一図）

匡郭・四周双边（二一・八糎×一五・二糎）

印記・「浅草文庫」「日本政府図書」「昌平坂」「番外書冊」

【刊年・刊行者】

⑤一八ウに、四周双边の長方枠（一七・〇糎×四・六糎）で囲まれて刊記が載る。

「明暦二丙申曆極月中旬／中野是誰梓行」

本書が刊行された明暦二年はちょうど、民衆を対象とした太平記読が盛り上がりつつあった時期に当たる。本書はそういった需要に应运えて出版されたと考えられる。

刊行者は中野是誰。京の書肆で寛永年間に多く仏書の出版を手掛けていた。ただし、本書のテキストそのものは慶安四年以前には成立していたと思われる。

ただし、本書のテキストそのものは慶安四年以前には成立していたと思われる。

【四〇】 太平記理尽図経 明暦二年刊 五冊

元老院旧蔵「請求番号一六七・〇〇九〇」

本書は前掲の『太平記理尽図経』の同版本である。ただし前掲本と大きく異なる点は、挿絵の手彩色が、朱色のみである点である。前掲本では四

色が用いられていたが、本書では山や川などの背景には色をつけず、陣形などの大事な部分のみ朱色を入れている。版木の磨滅の程度を見るに本書のほうがやや後の刷りか。

なお、本書は元老院の旧蔵書である。

【書誌】

外題・「太平記図経」左肩四周双边刷題簽（一七・五糎×三・五糎）※①

②③は左肩四周双边題簽に墨書「太平記図経」大きさはまちまちである。

内題・「太平記理尽図経」

表紙・改装青鈍色表紙（二六・八糎×一八・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二五丁（二八図）、②二五丁（二五図）、③

二六丁（一二図）、④二三丁（二六図）、⑤一八丁（一一図）

匡郭・四周双边（二一・八糎×一五・二糎）

印記・「元老院図書記」「太政官文庫」

備考・前掲本に比べ一回り小さい。

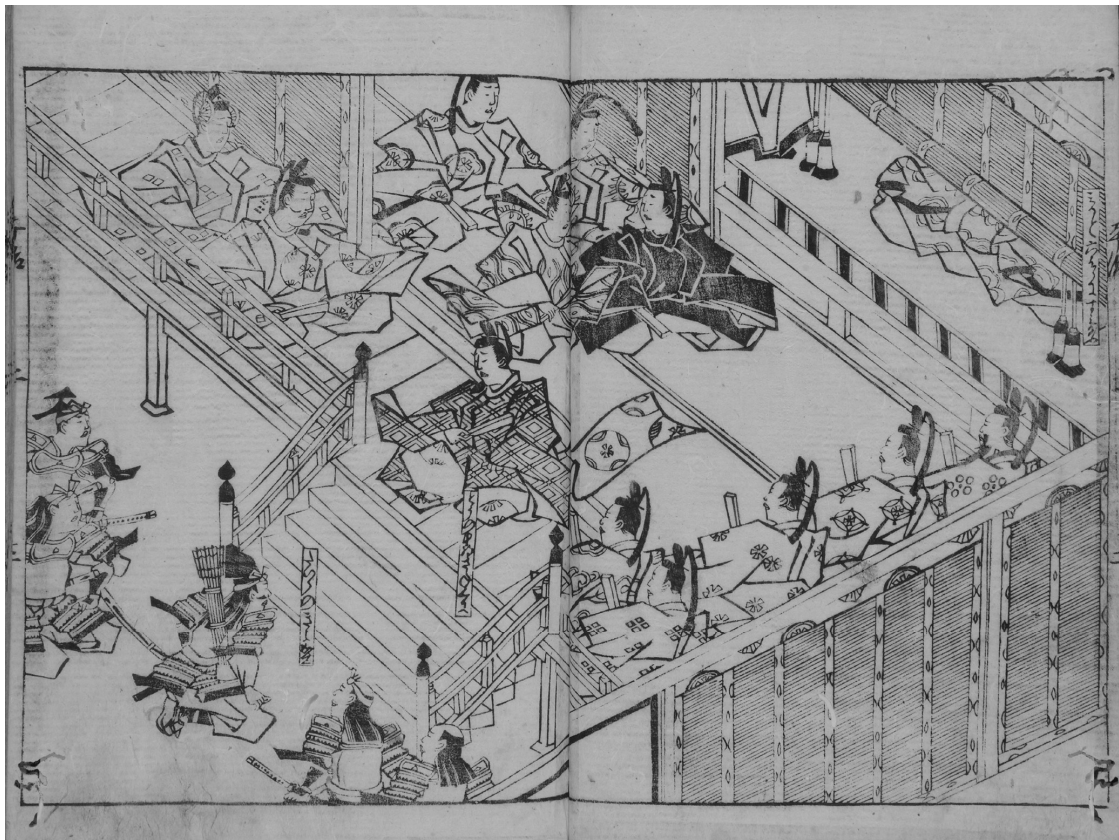
【刊年・刊行者】

⑤一八ウに、四周双边の長方枠（一七・〇糎×四・六糎）で囲まれて刊記が載る。

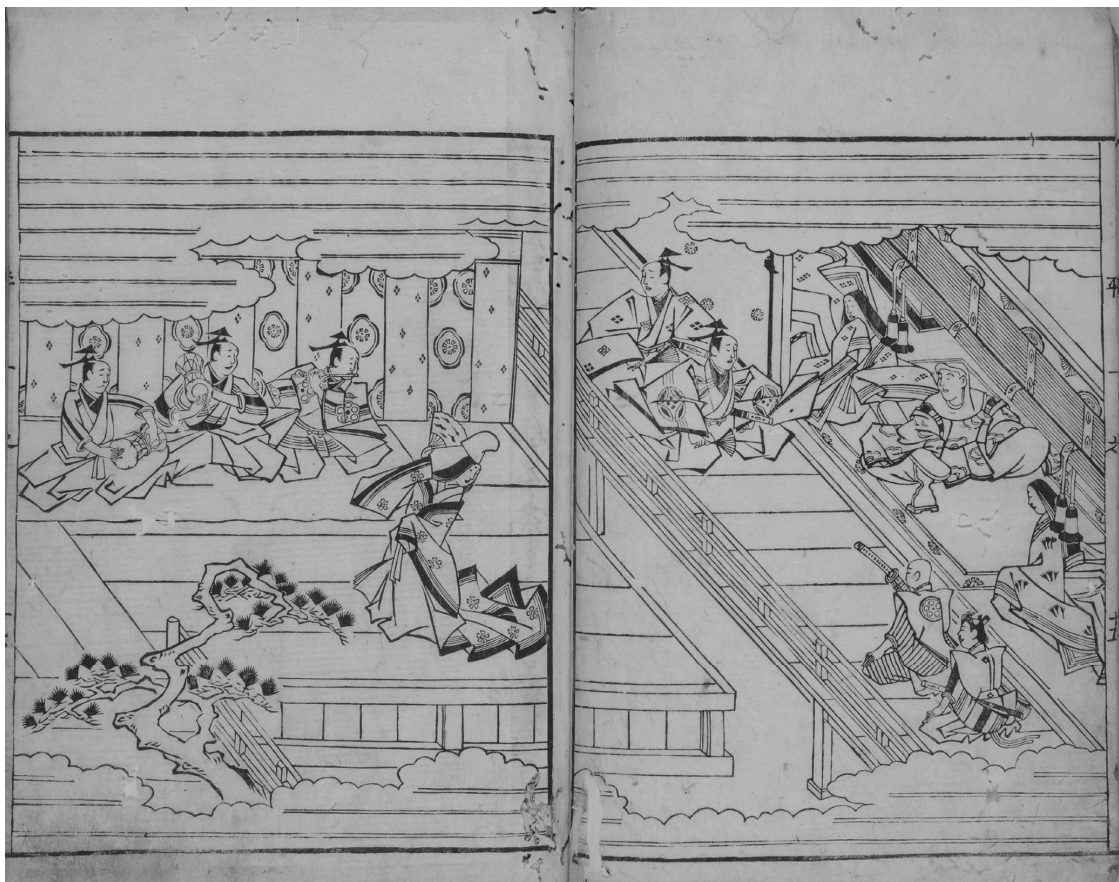
「明暦二丙申曆極月中旬／中野是誰梓行」

これは前掲本と同一のもの。ただし、本書のほうがやや後の刷りと考えられる。

（研究員）



貞享二年版『平治物語』巻一「光頼卿参内並許由事附清盛六波羅上著事」



明暦二年版『平家物語』巻一「祇王」



宝永四年版『源平盛衰記』卷一「清盛行大威徳法附行陀天並清水寺詣事」